

白鳥館跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-2001-1621-01

2001

2001
1621
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

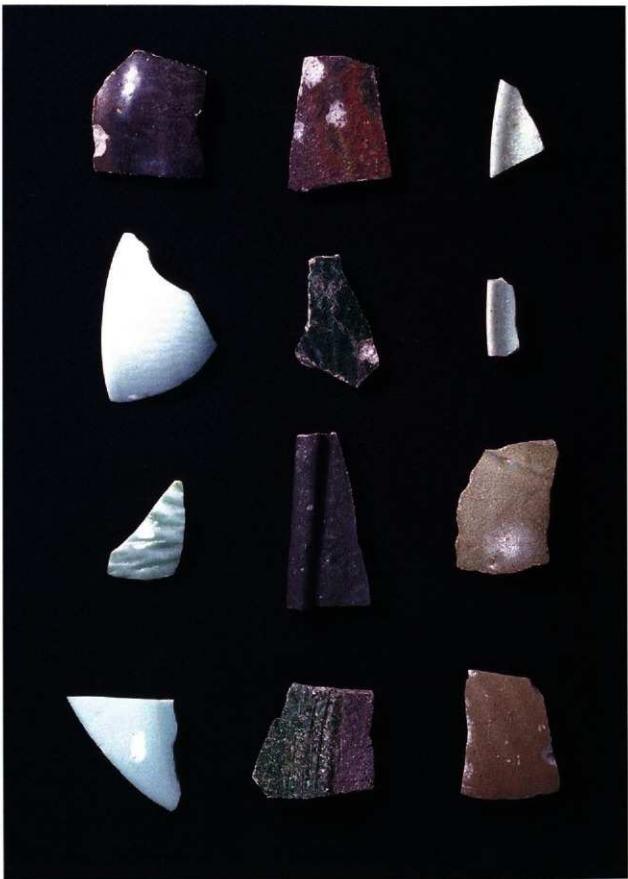
しろ とり たて あと
白 鳥 館 跡

発掘調査報告書

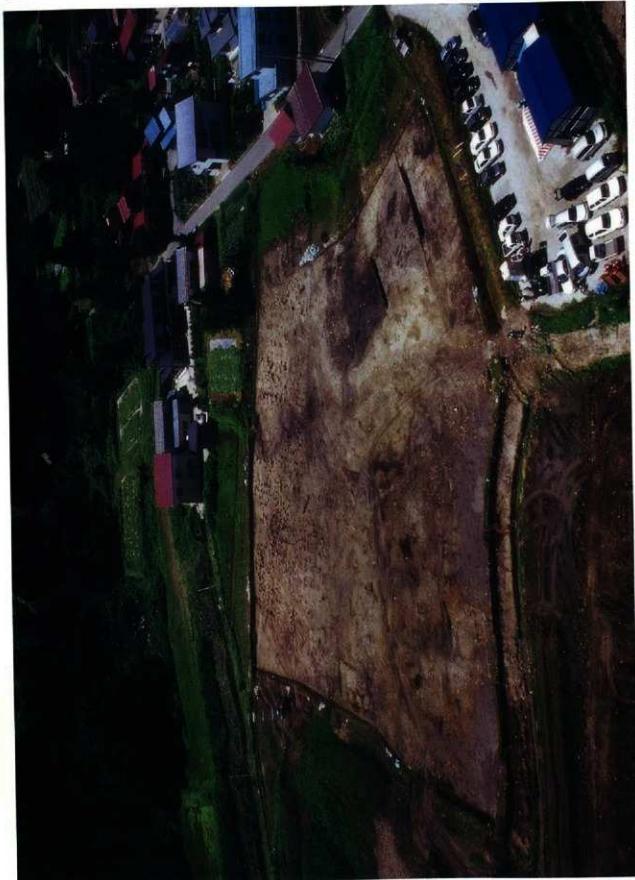
平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

上段 國產青磁·天目 中段 磁胎黑三彩盤 下段 中國青磁



巻頭図版2



序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、白鳥館跡の調査成果をまとめたものです。

白鳥館跡は、16世紀後半白鳥十郎長久が、谷地に進出するまで城を構えていた村山市白鳥地区に立地しています。周囲は豊かな田園地帯で、サクランボに代表される果樹生産も、大盛んな地域です。

この度、担い手育成基盤整備事業（宮下地区）に伴い、工事に先立って白鳥館跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代から近世までの幅広い遺物や、中世の掘立柱建物跡、旧河川跡などが検出されました。出土した遺物の中には、明代の龍泉窯の青磁や、慈谿窯緑釉三彩盤など、白鳥氏が権勢を誇っていた当時を忍ばせるものもあります。また、当時使われていた建物の柱も多数残っていました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は、平成12年度県営ほ場整備事業担い手育成型（宮下地区）に係る「白鳥館跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託を受けて、財團法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	白鳥館跡	遺跡番号	平成11年度登録
所在地	山形県村山市大字白鳥字宮下		
調査主体	財團法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成12年4月1日～平成13年3月31日		
現地調査	平成12年4月17日～平成12年7月28日		
調査担当者	調査第一課長	野尻 侃	
	主任調査研究員	黒坂 雅人	
	調査研究員	黒沼 昭夫（調査主任）	
	調査員	多田 和弘	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、村山平野土地改良事務所、戸沢土地改良区、北村山教育事務所、村山市教育委員会、及び山形県教育庁文化財課など関係諸機関にご協力をいただいた。
- 5 本書の作成・執筆は、黒沼昭夫、多田和弘が担当した。執筆にあたり、掘立柱建物跡の図上復元については八戸市博物館の佐々木浩一主任主査兼学芸員に御教示いただいた。記して感謝申し上げる。編集は高桑弘美・犬飼 透が担当し、全体について野尻 侃が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測	アジア航測株式会社
理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
出土遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所
- 7 出土遺物・調査記録類については、財團法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構、遺物の分類記号は次のとおりである。

S B …掘立柱建物跡	S K …土坑	S D …溝跡	E P …ピット
R P …土器・土製品	R W …木製品	R Q …石製品	R M …金属製品
P ……土器	S ……石		
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号とした。ただし、掘立柱建物跡については、新規番号とした。
- 3 報告書執筆基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) 遺構実測図は $1/20 \sim 1/200$ の縮図で採録し、おのおのスケールを付した。なお、実測図中■は、遺物の出土地点をあらわす。
 - (3) 遺物実測図・拓影図は、 $1/3$ 、 $1/4$ 、 $1/10$ で採録し、おのおのスケールを付した。なお、実測図中のスクリーントーン■は釉■は釉ハギ■は漆を、黒ベタは須恵器を表している。
 - (4) 遺物観察表中の計測値欄は、現存値を示す。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I ~ IV」等は遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。
 - (5) 土器投影図で、器表面の拓本は断面右側、器内側のそれは左側に表した。
 - (6) 遺物図版については、 $1/2$ 、 $1/3$ 、 $1/4$ 、 $1/8$ とした。
 - (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観測表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。
 - (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地	3
2 歴史的環境	3
III 遺跡の概観	
1 基本層序	6
2 遺構の分布	7
3 遺物の分布	7
IV 検出された遺構	
1 掘立柱建物跡	8
2 河川跡	14
3 土坑	15
V 出土した遺物	
1 陶器	27
2 磁器	27
3 土製品	28
4 繩文土器、土師器、須恵器	28
5 金属製品、銭貨	28
6 石器、石製品	28
7 木製品	28
8 柱根	28
VI まとめ	51
報告書抄録	59
付 編	
「白鳥館跡から出土した木材の年代と樹種」	卷末

表

表1 出土陶磁器・土製品観察表(1)	46
表2 出土陶磁器・土製品観察表(2)	47
表3 出土陶磁器・土製品観察表(3)	48
表4 出土土器観察表	49
表5 出土金属製品・石製品・木製品観察表	49
表6 出土銭貨観察表(1)	49
表7 出土銭貨観察表(2)	50
表8 出土柱根観察表	50
表9 出土柱根観察表(1)	55
表10 出土柱根観察表(2)	56
表11 出土柱根観察表(3)	57
表12 掘立柱建物跡軸方向・規模	58

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第20図 出土陶器(3)	31
第2図 遺跡概要図	4	第21図 出土陶器(4)、磁器(1)	32
第3図 地籍図	5	第22図 出土磁器(2)	33
第4図 基本層序図	6	第23図 出土磁器(3)	34
第5図 西側遺構配置図	9	第24図 出土磁器(4)、土製品	35
第6図 東側遺構配置図	11	第25図 出土土器・石・金属製品	36
第7図 SB1・2・3	16	第26図 出土石製品	37
第8図 SB4.SA29	17	第27図 出土木製品	38
第9図 SB5.SB7・SA6	18	第28図 出土銭貨	39
第10図 SB8.9.10.11	19	第29図 出土柱根(1)	40
第11図 SB12.13.14.15	20	第30図 出土柱根(2)	41
第12図 SB16.17.18.19.20.21.22.23	21	第31図 出土柱根(3)	42
第13図 SB24.25.26.27	22	第32図 出土柱根(4)	43
第14図 SB28.30.34・SA41	23	第33図 出土柱根(5)	44
第15図 SG240 旧河川跡	24	第34図 出土柱根(6)	45
第16図 土坑跡(1)	25	第35図 掘立柱建物跡(1)	52
第17図 土坑跡(2)	26	第36図 掘立柱建物跡(2)	53
第18図 出土陶器(1)	29	第37図 掘立柱建物跡(3)	54
第19図 出土陶器(2)	30	第38図 切り合い関係図(旧→新)	57

図 版

- 卷頭図版1 輸入青磁
- 卷頭図版2 調査区全景
- 図版1 SB 1.2.4.5.7
- 図版2 C-16グリッドSB群
- 図版3 調査区北端SB群
- 図版4 遺物出土状況
- 図版5 遺物出土状況
- 図版6 柱根出土状況
- 図版7 柱根出土状況
- 図版8 遺物出土状況
- 図版9 出土陶磁器・土製品(1)
- 図版10 出土陶磁器・土製品(2)

- 図版11 出土陶磁器・土製品(3)
- 図版12 出土陶磁器・土製品(4)
- 図版13 出土陶磁器・土製品(5)
- 図版14 出土陶磁器・土製品(6)
- 図版15 出土陶磁器・土製品(7)
- 図版16 出土陶磁器・土製品(8)
- 図版17 出土金属製品・石製品(1)
- 図版18 出土石製品(2)
- 図版19 出土木製品(1)
- 図版20 出土柱根(1)
- 図版21 出土柱根(2)
- 図版22 出土柱根(3)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

白鳥館跡は、山形県のほぼ中心、村山市大字白鳥字宮下に所在し、中心地である村山市権岡の北西部の山裾に立地している。付近には縄文時代の遺跡が数多く分布し、豊かな自然を背景に、人々が連絡と生活を営んでいたことがうかがえる。

平成12年度、村山平野土地改良事務所の県営は場整備事業扱い手育成型（宮下地区）が、この遺跡に係ることになり、山形県教育庁文化財課は、平成11年10月に事業予定地について試掘調査を実施した。

当初、遺跡台帳には忿仏塙B遺跡という縄文時代の集落跡と記載されていたが、台帳記載の地番、字名と合致しないこと、縄文時代の遺構・遺物が出土しなかったことなどから、台帳記載時の手違いによる誤記と考えられた。

しかし、試掘調査の結果、中世陶器と建物跡などが検出され、古代の須恵器片も出土した。また、地元に白鳥十郎の居館との伝承が残っており、試掘結果で発見された遺構と遺物はその裏付けとなるものと判断され、白鳥館跡として平成11年度新規登録された。

以上のことから、遺跡が事業予定地に含まれることが判明し、同事業との関連でやむをえず削平されると判断された白鳥館跡域の6,400m²について緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

発掘調査に至るまでの協議等は、以下の通りである。

◆県教育委員会より、県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県営は場整備事業（宮下地区）の実施に伴う地区内埋蔵文化財発掘調査」の依頼（H12／2／4）

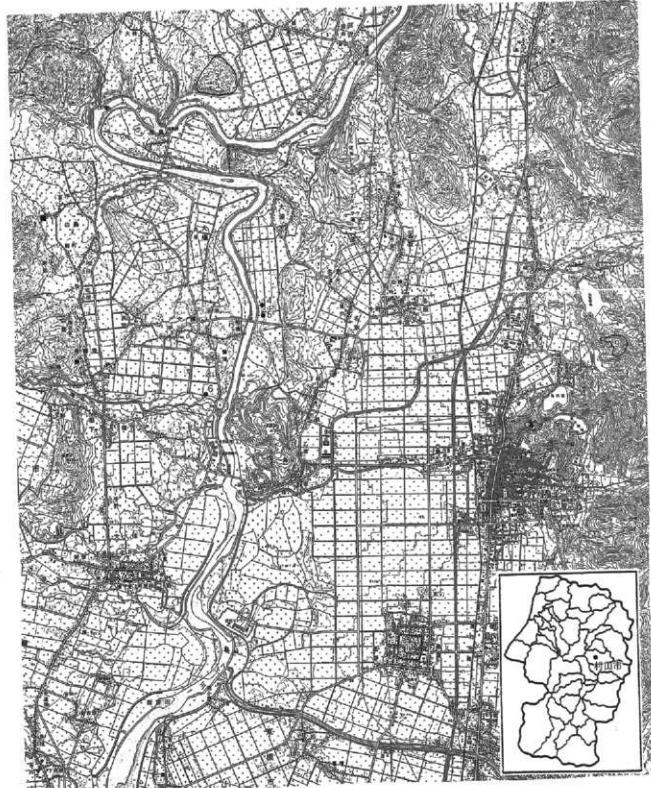
◆県教育委員会と県埋蔵文化財センターとで、「県農林事業関係発掘調査委託契約」を締結（H12／4／1）

2 調査の方法と経過

平成12年4月11日、村山平野土地改良事務所において、白鳥館跡に係る遺跡発掘調査の打合会を開催し、発掘調査に至る経過報告、調査体制、調査の方法等が確認された。

4月17日に調査事務所を設置し、現地調査を開始した。4月19日から、調査区内を遺構確認面まで重機で掘り下げた。雪解けが遅れ、調査区内の地盤が軟弱なため、当初の予定より遅れたが、以後、遺構検出に向けての面整理作業を継続。多くの柱穴、土坑、川跡等を確認する。5月12日より、検出した遺構の精査・記録作業を開始した。7月6日、遺構をより明確にするため、2回目の重機による表土除去作業を行い、新たに柱穴を確認する。その後、発掘作業員を増員し、予定通り7月28日に調査を終了した。

なお、調査期間中（7月26日）現地で調査説明会を開催したところ、約130名の参加が得られた。



1 白鳥南跡 2 白鳥城跡 3 富並城跡 4 後原墳墓 5 後原板碑 6 墓点城跡 7 大久保城跡 8 飯田城跡
9 横山南跡 10 横岡城跡 11 長野城跡
国土地理院発行2万5千分の1地図「富並」「谷地」「延沢」「横岡」を1/2に縮小して使用 (1:50,000)

第1図 遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

村山市は山形盆地の北部に位置し、市北部の名取低地は尾花沢盆地との境界部にある。東は奥羽山脈の舟形山から西は出羽丘陵の葉山に至る。市の中央部には市域を東西に分断するように最上川が北流し、市北部で葉山山系の丘陵に切り込むように蛇行している。その東側には奥羽山脈から発する大沢川、大旦川があり、それぞれ横岡扇状地と横山扇状地の二つの扇状地を形成している。

白鳥館跡は村山市の北西端にあたる大字白鳥字宮下に所在する。当地区は最上川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は115mを測る。西側には葉山山麓が隣接し、そこから市街地のある南東方向に傾斜している。

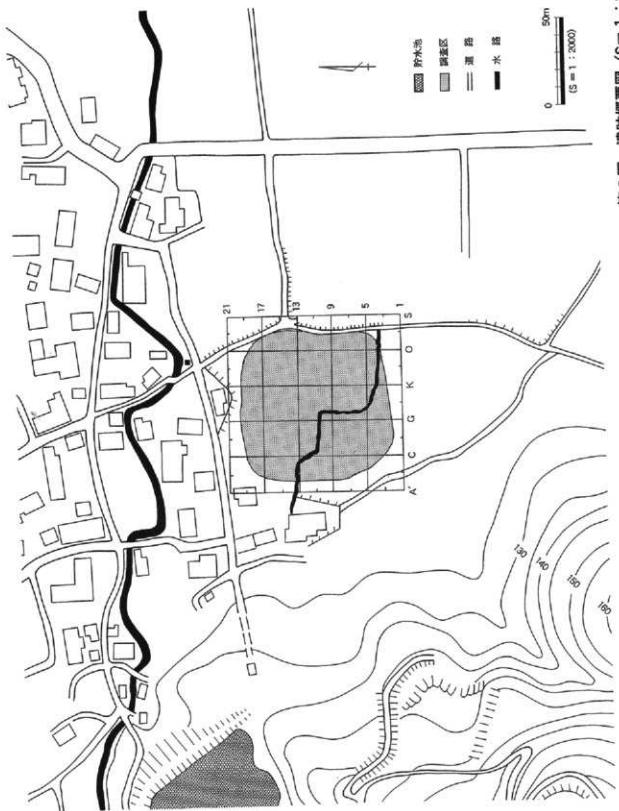
2 歴史的環境

村山郡は平安期には「小田島莊」という摂関家荘園の一部であった。しかし中世に入ると、鎌倉期には北条氏、南北朝期には室町氏、室町期には最上氏と多くの領主が入れ替っている。とくに最上氏は国人領主の警戒のために村山郡の防衛を重視し、最上満直の代に大久保城（第1図7）や横岡城（第1図10）を築城し子息を領主としている。

白鳥館跡からは中世の国産陶磁器、中国陶磁器、古銭をはじめとする当時の有力者の居住を裏付ける遺物が出土している。また宮下地区には鎌倉時代に作られたという宝鏡印塔と六面鐘があり、当時の集落の賑わいをうかがわせる。村山には「樋」「樋道」「樋の下」など樋（館）のつく地名が多く存在し、村落の主である国人が館を拠点にしてこの一帯に土着していた。地元の白鳥郷の豪族である白鳥氏もこのよう国内の一勢力として台頭したものと考えられる。

白鳥氏の出自は、一説には前九年の役（1051～1062）で源氏に滅ぼされた奥州安倍氏を祖とする説があるが、記録文書の上では明らかにされておらず、いつごろから白鳥郷に土着したかはいまだ不明である。はじめて白鳥氏の名が史料に登場するのは「後太平記」であり、南北朝の争乱の際に南朝方として戦闘に参加したことが記録に残っている。天正2年（1574）には、白鳥氏の当主である白鳥十郎長久が山形の最上氏と米沢の伊達氏の紛争があった際に和解の仲介をしている。また天正5年（1577）には、山形の領主のなかでいち早く織田信長に名馬を献上しており、中央に対して広い視野をもっていた数少ない武将のひとりであった。しかし天正12年（1584）に、最上義光は白鳥氏の勢力拡大を警戒し、白鳥十郎長久を山形城で謀殺した。その後白鳥氏は滅亡している。

白鳥城跡（第1図2）は本遺跡から南約1kmのところに所在し、葉山山系を背後に構える山城で白鳥氏の本拠地である。白鳥氏が白鳥城から南方の谷地城に本拠地を移した時期は、「月山神社縁起書」で、永禄年間（1558～1569）に谷地城主である白鳥氏が月山神社社殿を再建したことが記録にありそのあたりと考えられる。墓点城（第1図6）は白鳥城の支城であり、東側に隣接する最上川を抑える防衛拠点であった。



道路の概観

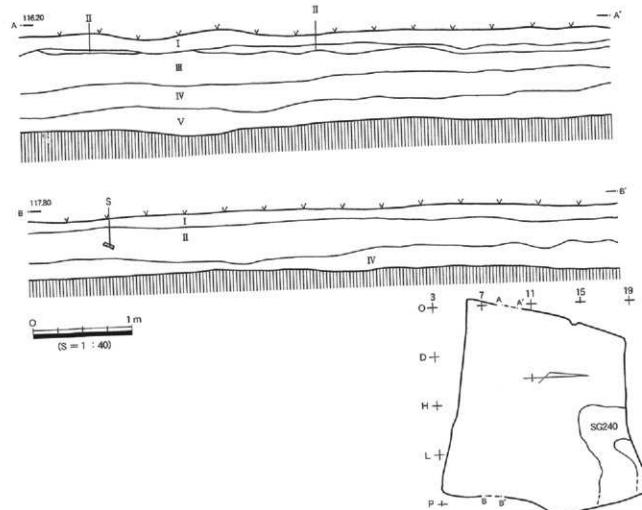
III 遺跡の概観

1 基本層序

白島館跡の調査区は、村山市の北西端にあたり、西から東にかけて緩やかに傾斜している。遺跡の範囲の大半は、水田となっている。

第3図は、調査区の土層断面を示している。A-A'は西壁の層序である。第I・II層は耕作土である。第IIIは、黒色のシルト質の土壤で、粘性を持ち黄灰色の礫を含む。第IV層は、III層と同様の粘質のシルト質の土壤で、III層よりも礫の混入割合が高く、風化した緑灰色の礫を含む。この第IV層上面が遺構検出面となっている。黄灰色の砂質シルトではあるが、しまりが強く、乾燥してくると非常に硬化する。この層を堀込む形で遺構が分布している。

B-B'は東壁の層序である。第I層は耕作土である。西壁で見られた基盤層が確認されないが、西壁と同様の堆積状況である。第IV層上面が遺構検出面である。



第4図 基本層序図

2 遺構の分布

遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、一段高い西側部分に集中し、標高が一段低くなる東側部分は、ほ場整備などによる削平を受けて破壊され、密度は低い。明治21年に作成された地籍図を見ると、調査区東側は、字界が複雑に引かれ、その後の基盤整備により、現況の水田に整備されたものと考えられる。遺構総数は掘立柱建物跡、土坑、柱穴、河川跡など、2000基を数える。

J-17グリッドを中心にして、旧河川が検出された。試掘では、堀跡ではないかと考えられたが、北側に大きく蛇行していること、断面の観察等から河川跡と判断された。

柱穴は柱根を伴うものが多く検出された。堀方が大きく、深さも最大的もので60cmを測り、礫石を設置して沈下を防止したものや、根固石を設置して柱を固定したものなども多数検出されている。

調査区の南西部に直径5mを越える円形の遺構が2基検出された。井戸跡と考えられたが、精査の結果、深さが20cm程度と非常に浅く、土坑と考えられる。底面より瓦質土器や木製品、焼管吸口等の遺物が数点出土しているが、遺構の性格は不明である。その他にも直径1mを超える円形の遺構が10基ほど検出されたが、いずれの遺構も浅く、井戸跡は一基も検出されていない。西側に位置する山裾の湧水を利用したのか、調査区外にあるのかは不明である。

掘立柱建物跡は西側に集中している。ここは地籍図からもわかるように、宅地や大規模な水田として利用されていたため、削平を受けず、多くの遺構が確認されている。

C-G-8グリッド周辺からも柱根を伴う柱穴が多數検出されている。南側は礫層で遺構は確認できず、北側に遺構が続くものと考えられた。北側の調査区外を掘り下げたところ土色変化が認められ、遺構の存在が確認された。また、調査区西端にも掘立柱建物跡の柱列が確認されており、西側の山際まで遺構が分布していることがうかがえる。

3 遺物の分布

遺物は、総数で整理箱6箱ほどと非常に少ない。しかも、遺構内からの出土点数は十数点にとどまり、遺物から遺構の年代を特定することは困難である。ほとんどの遺物は現在の鞋畔部分からの出土であり、ほ場を整備する際に廃棄したものと考えられる。年代的には縄文時代の土器、打製石斧、磨製石斧、須恵器の蓋、甕、近代陶磁器までと非常に幅広く出土している。遺物の中心になるのは陶磁器類であるが、13世紀から近代までと年代の幅も広く、器種も多岐にわたる。中には明代の龍泉窯の綠釉陶器、慈谿窯綠釉三彩盤等の、中国製の陶磁器も破片ではあるが出土している。

柱根は約100本ほど出土しており、面取りをした角柱、表皮を剥ぎ粗く加工したものの、表皮を剥ぎ取っただけのものとに大別できる。表面を観察すると地中に埋設する部分を焼き、腐食を防ぐための加工も加えられているものも確認されている。

古銭が50枚出土しており、大部分が北宋銭である。観察した結果、そのほとんどが私鑄銭であった。

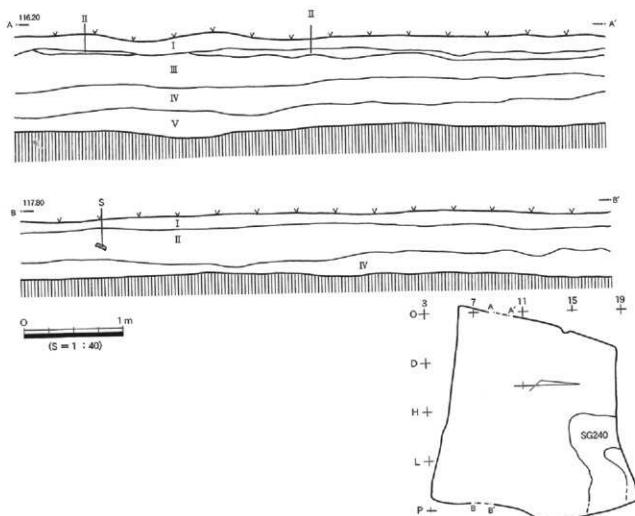
III 遺跡の概観

1 基本層序

白鳥館跡の調査区は、村山市の北西端にあたり、西から東にかけて緩やかに傾斜している。遺跡の範囲の大半は、水田となっている。

第3図は、調査区の土層断面を示している。A-A'は西壁の層序である。第I・II層は耕作土である。第IIIは、黒色のシルト質の土壤で、粘性を持ち黄灰色の礫を含む。第IV層は、Ⅲ層と同様の粘質のシルト質の土壤で、Ⅲ層よりも礫の混入割合が高く、風化した綠灰色の礫を含む。この第IV層上面が遺構検出面となっている。黄灰色の砂質シルトではあるが、しまりが強く、乾燥してくると非常に硬化する。この層を埋込む形で遺構が分布している。

B-B'は東壁の層序である。第I層は耕作土である。西壁で見られた基盤層が確認されないが、西壁と同様の堆積状況である。第IV層上面が遺構検出面である。



第4図 基本層序図

2 遺構の分布

遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、一段高い西側部分に集中し、標高が一段低くなる東側部分は、ほ場整備などによる削平を受けて破壊され、密度は低い。明治21年に作成された地籍図を見ると、調査区東側は、界字が複雑に引かれ、その後の基盤整備により、現況の水田に整備されたものと考えられる。遺構総数は掘立柱建物跡、土坑、柱穴、河川跡など、2000基を数える。

J-17グリッドを中心に、旧河川が検出された。試掘では、堀跡ではないかと考えられたが、北側に大きく蛇行していること、断面の観察等から河川跡と判断された。

柱穴は柱根を伴うものが多く検出された。堀方が大きく、深さも最大のもので60cmを測り、礎石を設置して沈下を防止したものや、根固石を設置して柱を固定したものなども多数検出されている。

調査区の南西部に直径5mを越える円形の遺構が2基検出された。井戸跡と考えられたが、精査の結果、深さが20cm程度と非常に浅く、土坑と考えられる。底面より瓦質土器や木製品、煙管吸口等の遺物が数点出土しているが、遺構の性格は不明である。その他にも直径1mを超える円形の遺構が10基ほど検出されたが、いずれの遺構も浅く、井戸跡は一基も検出されていない。西側に位置する山裾の湧水を利用したのか、調査区外にあるのかは不明である。

掘立柱建物跡は西側に集中している。ここは地籍図からもわかるように、宅地や大規模な水田として利用されていたため、削平を受けず、多くの遺構が確認されている。

C-G-8グリッド周辺からも柱根を伴う柱穴が多数検出されている。南側は礫層で遺構は確認できず、北側に遺構が続くものと考えられた。北側の調査区外を掘り下げたところ土色変化が認められ、遺構の存在が確認された。また、調査区西端にも掘立柱建物跡の柱列が確認されており、西側の山麓まで遺構が分布していることがうかがえる。

3 遺物の分布

遺物は、総数で整理箱6箱ほどと非常に少ない。しかも、遺構内からの出土点数は十数点にとどまり、遺物から遺構の年代を特定することは困難である。ほとんどの遺物は現在の畦畔部分からの出土であり、ほ場を整備する際に廃棄したものと考えられる。年代的には縄文時代の土器、打製石斧、磨製石斧、須恵器の蓋、甕、近代陶磁器までと非常に幅広く出土している。遺物の中心になるのは陶磁器類であるが、13世紀から近代までと年代の幅も広く、器種も多岐にわたる。中には明代の龍泉窯の綠釉陶器、慈谿窯綠釉三彩盤等の、中国製の陶磁器も破片ではあるが出土している。

柱根は約100本ほど出土しており、面取りをした角柱、表皮を剥ぎ粗く加工したもの、表皮を剥ぎ取っただけのものとに大別できる。表面を観察すると地中に埋設する部分を焼き、腐食を防ぐための加工も加えられているものも確認されている。

古銭が50枚出土しており、大部分が北宋銭である。観察した結果、そのほとんどが私鋳銭であった。

IV 検出された遺構

1 挖立柱建物跡

今回の調査では、多くの掘立柱建物跡が検出され、現地調査後の図上復元も含めると62棟を数える。ここでは、現地調査段階で検出できたもの、調査終了後一部見直しを加えたものについて掲載する。

SB1 (第7図) F-7に位置し、桁行7.28m、梁行5.24mを測る。現地調査段階では、身舎の東西3間、南北5間の建物と考えられた。しかし、調査終了後柱穴に残存する柱根とアタリを挿入し、検討を加えたところ、中央部分だけ柱間が10尺と広くなること、柱を結ぶ軸線が微妙にずれること等から、身舎の東西2間、南北3間の建物が2棟並列していると判断し、SB1とSB2に分離した。どちらの建物も柱穴の覆土は黒色の粘質土に青灰色の風化礫を含む1層である。残存している柱(16)は、8面が面取りされた4寸角の柱であり、根固石を設置して、柱を固定している。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-12°-Eである。

SB2(第7図) F-9に位置し、身舎の東西3間南北5間。桁行7.30m、梁行5.52mを測る。SB1と同規模の建物跡である。柱穴掘方からの遺物の出土はなかったが、建物を構成する柱穴の北側の造構確認面から銭貨(RM16)がまとまって出土している。明確な遺構は確認されず、埋納錢とは考えられない。現在の上棟式にあたるような、散銭散米の儀礼的な行事で使用された可能性もうかがえる。主軸方向はN-11°-E。

SB3 (第7図) I-5に位置し、身舎の東西3間、南北1間、桁行7.35m、梁行4mを測る。調査区南部中央I-6に位置し、柱根を含む。検出された柱根はほぼ四角に加工されたもので、腐食を防ぐために柱の表面を炭化させる加工が施されている。主軸方向はN-4°-E。

SB4 (第8図) B-8~9に位置し、現地調査段階では身舎の東西3間、南北5間の規模であったが、調査終了後図上で確認したところ、掘方の規模、覆土の状況などから、南に延びると考えられ、身舎の東西3間、南北7間の規模となった桁行14.86m、梁行6.14mの建物跡である。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。残存する柱(27)は粗く面取りされた角柱で、底部付近に目途穴が開けられている。主軸方向はN-22°-E。

SB5 (第9図) A-9~12に位置し、身舎の東西不明、南北7間、桁行15.36mを測る。SB1と同規模の掘立柱建物跡である。東側部分のみの検出であり、西側の調査区外に続くものと考えられる。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-22°-E。

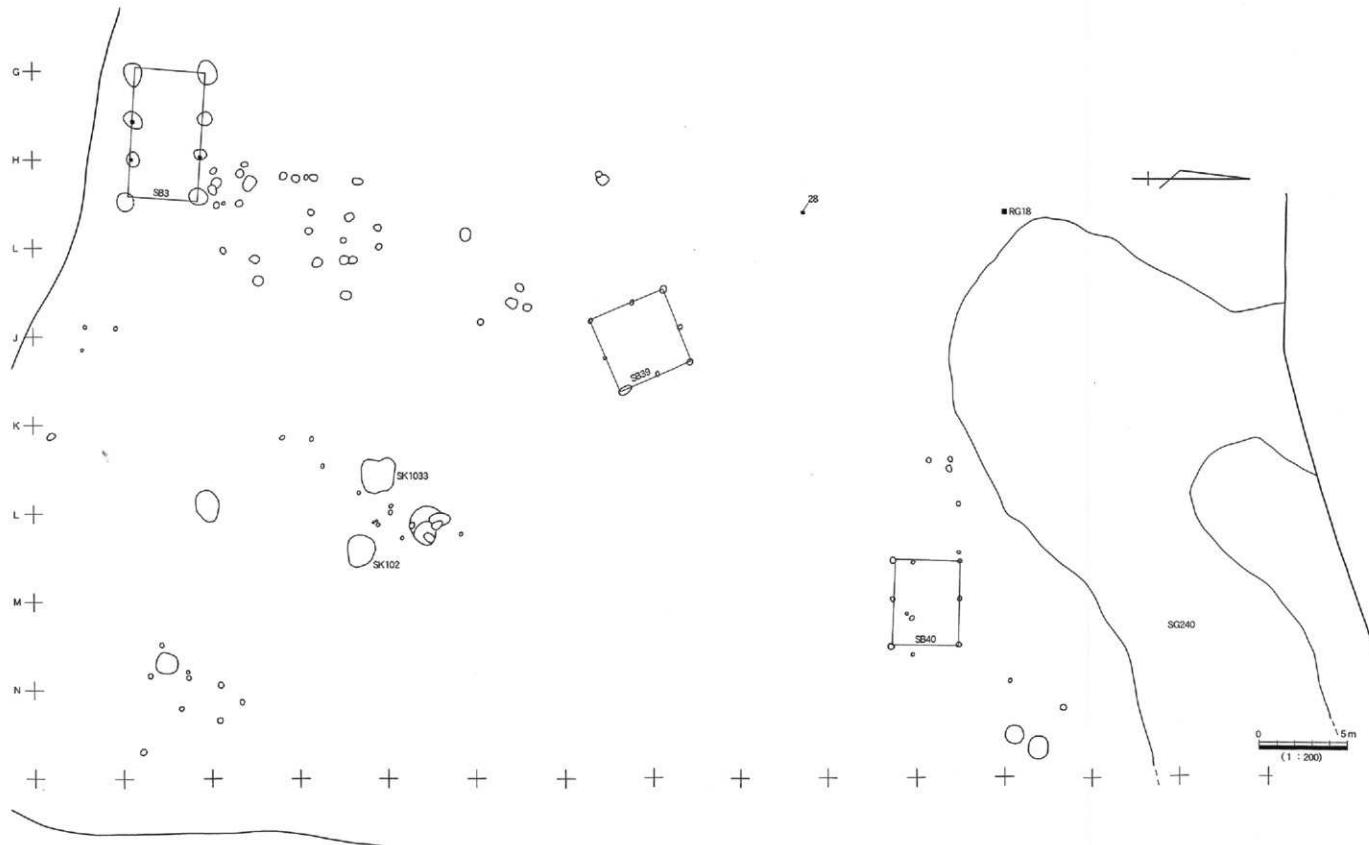
SA6 (第9図) B-9に位置するSB5と同一軸の櫛列である。SB5とSB7の間に位置し、これらの建物に付随するものと考えられる。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-22°-E。

SB7 (第9図) C-8に位置し、身舎の規模は東西2間、南北2間、桁行4.06m、梁行3.72mの建物跡である。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-22°-E。

以下の建物はD-16周辺に位置する建物跡である。柱穴の切り合いが激しく度々建て替えを行った形跡が認められる。覆土は地山に黒色の粘質土がマーブル状に混じり、平面プランの確認が困難であった。ここに掲載する建物は、調査区が西から東へ傾斜しておりその傾斜の軸に



第5図 西側遺構配置図



第6図 東側造構配置図

沿うような形で建てられている。これらの建物に使用されていた柱は、側面が粗く加工されたものの、立木の根の湾曲した部分を加工し、まっすぐな柱状に加工したものなどに大別できる。また、理由ははっきりしないが、柱穴の覆土内に細く割いた竹を敷き、その上にむしろを敷いているものもあった。これらの建物は、南北の柱間が3mを越える規模のものが多く、他の掘立柱建物跡とは構造や用途が異なると考えられる。

SB8 (第10図) D-16に位置し、身舎の東西2間、南北不明、桁行不明、梁行m4.60を測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-42°-E。

SB9 (第10図) D-F-16に位置し、身舎の東西4間、南北2間、桁行8.45m、梁行5.30mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-21°-E。

SB10 (第10図) D-16に位置し、の東西不明、南北2間、桁行不明、梁行5.22mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-21°-E。

SB11 (第10図) F-16に位置し身舎の東西不明、南北2間、桁行不明、梁行6.55mを測る。穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-22°-E。

SB12 (第11図) D-16に位置し、身舎の東西不明、南北2間、桁行不明、梁行6.53mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-16°-E。

SB13 (第11図) D-16に位置し、身舎の東西不明、南北1間、梁行4.50mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-38°-E。

SB14 (第11図) D-16に位置し、身舎の東西不明、南北2間、梁行4.80mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-20°-E。

SB15 (第11図) E-15に位置し身舎の東西4間、南北2間、桁行8.36m、梁行7.20mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-17°-E。

以下の掘立柱建物跡柱は、調査区の北端F-I-18に位置し、建物の南側部分のみ検出された掘立柱建物跡である。これらの建物を構成する柱穴の覆土は全て黒色の粘質土に青灰色の風化礫を含んでいる。これらの柱穴が集中して検出された部分の南側F-H-17は、岩石が厚く堆積しており、遺構の連續性は見られなかった。北側調査区外の耕作土を除去したところ、これらの柱穴と同じ覆土の土色変化が確認でき、北側に建物が展開すると考えられる。これらの建物に使用されている柱根は、径25cmを越える大型のものがほとんどで、立木を伐採した後、表皮を剥ぎ取った丸い柱である。側面の加工はあまり認められず、底部が平らに加工されている。柱穴内には根固石が設置されており、柱を固定していたことがうかがえる。なお、これらの柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。またこれらの柱穴が確認された地域は耕作土表面から確認面までが20cmと浅く、表土を除去した時点で、遺構が確認できず柱根しか確認できないものもあった(38、22)。遺構が確認できなかつたため、柱のあった位置を特定することができず、建物を構成する際には除外している。

SB16 (第12図) E-18に位置し、身舎の東西2間、南北不明、梁行5.73mを測る。主軸方向はN-2°-E。柱(37)が残存する。

SB17 (第12図) D-F-18に位置し、身舎の東西2間、南北不明、梁行5.44mを測る。SB22

を切る。主軸方向はN-4° -E。

SB18 (第12図) G-18に位置し、身舎の東西2間、南北不明、梁行5.58mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-16° -E。

SB19 (第12図) E-18に位置し、身舎の東西2間、南北不明、梁行5.66mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-3° -E。柱(43)が残存する。

SB20 (第12図) G-18に位置し、SB22を切る。身舎の東西2間、南北不明、梁行7.46mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-25° -W。

SB21 (第12図) G-18に位置し、身舎の東西3間、南北不明、梁行7.46mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-10° -E。柱(14, 33)が残存する。

SB22 (第12図) F-18に位置し、身舎の東西2間、南北不明、梁行4.90mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-2° -E。柱(34, 45, 49)が残存する。

SB23 (第12図) H-18に位置し、身舎の規模、桁行梁行とも不明。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-6° -W。

以下の建物跡は調査区中央部G-12周辺において検出された建物跡である。多くの柱根を含む建物跡である。使用されている柱は、径が15cm程度の細い柱が多い。底面の加工は認められず、伐採した時の刃物の痕跡が残り、U字状の形態を有する。側面の加工もあまり見られず、表皮を剥ぎ取ったままの状態のものが多い。

SB24 (第13図) F-13に位置し、身舎の東西3間、南北2間、桁行8.16m梁行、4.10mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-18° -E。

SB25 (第13図) F-12に位置し、身舎の東西2間、南北3間、桁行8.20m梁行、4.98mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-18° -E。

SB26 (第13図) 身F-11に位置し、舎の東西2間、南北1間、桁行5.04m、梁行4.10mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-2° -E。

SB27 (第13図) F-12～13に位置し、身舎の東西1間、南北3間、桁行6.81m、梁行2.40mを測る。からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-5° -E。

SB28 (第14図) F-12～13に位置し、身舎の東西2間、南北3間、桁行9.18m、梁行5.04mの建物である。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-20° -E。

SB30 (第14図) D-10～11に位置し、身舎の東西1間、南北3間、桁行6.46m、梁行2.55mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。主軸方向はN-20° -E。

SB34 (第14図) F-10に位置し、身舎の東西3間、南北2間、桁行5.30m、梁行3.98mを測る。柱穴掘方からの遺物の出土はなかった。同じ軸のSA41が東側に立地しており、何らかの関係があるものと考えられる。主軸方向はN-6° -W。

2 河川跡 N～Q-16に位置する。事前の試掘調査では、堀跡と考えられた。しかし、K-16付近で大きく蛇行し東へと流路を変える。また、調査区東側の既存の農道の法面、及びさらには東側の水田造成工事で掘削された壁面に、この川跡に連続すると思われる断面が観察された。

以上の3点から、河川跡と判断した。川幅は、蛇行する部分で最大16.5m、その他の部分では10m、深さは最深部で1mを測る。壁は両岸とも緩やかに立ち上がる。

調査では、2カ所にトレンチを設定して川底まで掘り下げ、堆積土の状況を記録しながら、遺物の有無を探った。その結果、底面で流木を検出するが遺物をほとんど含まないことから、川底の地形を確認する精査にとどめた。断面の観察では4、7、9、10層目に腐植土層が堆積し、その間に、砂礫層が堆積することから、流れが緩やかな時期に植物が繁茂し、その後の増水などにより砂礫が運ばれて堆積したものと考えられる。人為的に埋め戻された痕跡がないことから、水量が少なくなるにつれて、自然に埋まっていたものと考えられる。

3 土坑 SK1024 (第13図) M-7に位置し、長軸172cm、短軸153cm、深さ20cmを測る。東側が削平を受け、標高が低くなっている。覆土は黒色粘性シルトの一層である。確認面より10cmのところで約20cmを越える岩石に混じり、瓷器系陶器の壺(第20図29、RP 4)が出土している。また、底部直上で木製品の部材(第27図130、129、128、RW 5、6、7)が出土している。壁は緩やかに立ち上がる。当初井戸跡の掘方と考えたが性格は不明である。

SK1033 (第13図) L-7に位置し、長軸227cm、短軸205cmを測り、確認面からの深さは15cmを測る。覆土は黒色粘性シルトの一層で、底面直上より土師器高台付坏の底部(第29図99、RP 1)須恵器喪具部(第29図102、RP 2)が出土している。

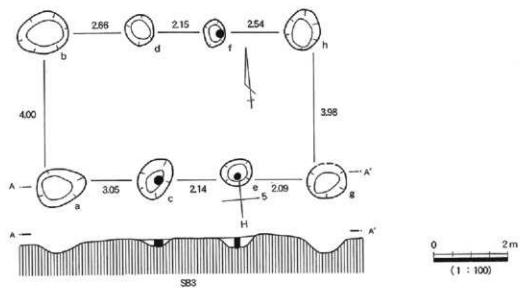
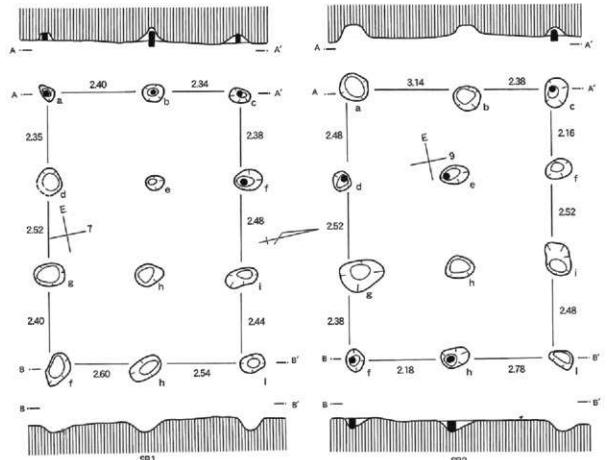
SK1860 (第13図) D-11に位置し、長軸160cm、短軸95cmを測り、確認面からの深さは25cmを測る。覆土は黒色砂質シルトと黄灰色砂質シルトの2層で、2層目上面より、砥石(第26図114、RQ25)が出土している。SK2223を切る。壁は緩やかに立ち上がる。

SK2223 (第13図) D-11に位置し長軸190cm、短軸60cmを測り、確認面からの深さは15cmを測る。SK1860に切られる。FIから、鉄滓(RM24)が出土している。

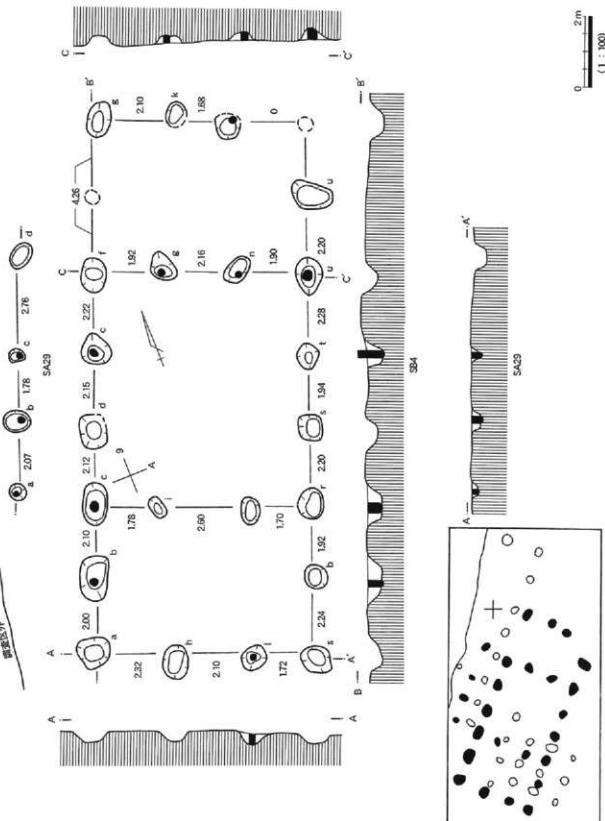
SK2148 (第14図) G-13に位置し、長軸220cm、短軸183cmを測り、確認面からの深さは20cmを測る。遺構覆土内に縄文土器の破片が多量に混入している。土器の断面を観察するとかなり摩滅していること、調査区内に他の縄文時代の遺構が確認されなかつたことから、周囲に立地する他の縄文時代の遺跡から流れ込んだものと思われる。

SK611 (第14図) B-9に位置し、長軸550cm、短軸322cmを測り、確認面からの深さは24cmを測る。SB4に切られる。西側の標高が高く、東側が削平されている。覆土は黒色の粘質土の1層である。底面に、自然に堆積したと思われる約20cmを越える岩石が多く残っている。底面は固くしまった砂質土である。当初井戸の掘方と考えたが、性格は不明である。遺物は出土していない。

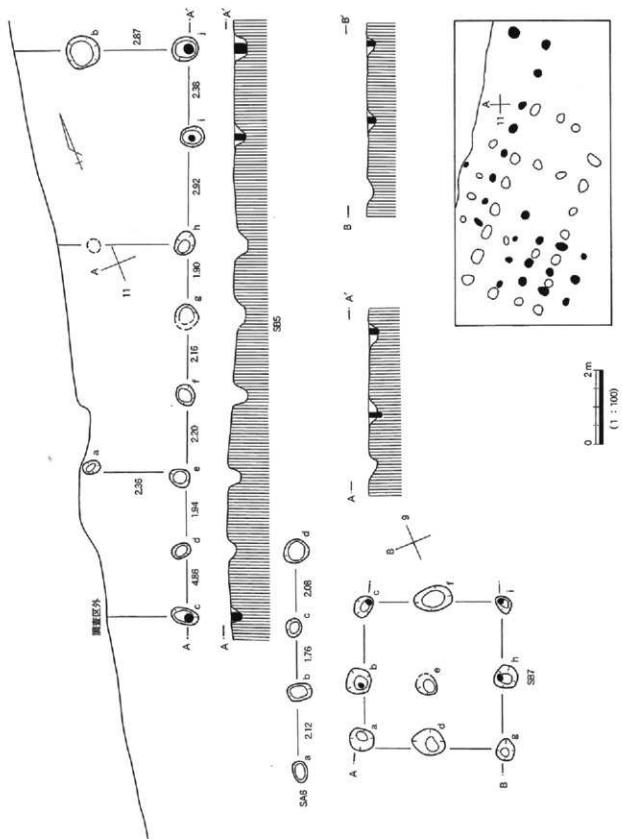
SK792 (第14図) E-8に位置し、長軸450cm、短軸365cmを測り、確認面からの深さは12cmを測る。SK611同様に東側が削平を受けている。壁は緩やかに立ち上がる。壙鉢(第20図39、RP8)、煙管吸口(第25図106、RM9)が出土している。底面に約20cmを越える岩石が残っている。覆土は、黒色シルトの一層で小粒の礫を含む自然堆積と考えられる。性格は不明である。



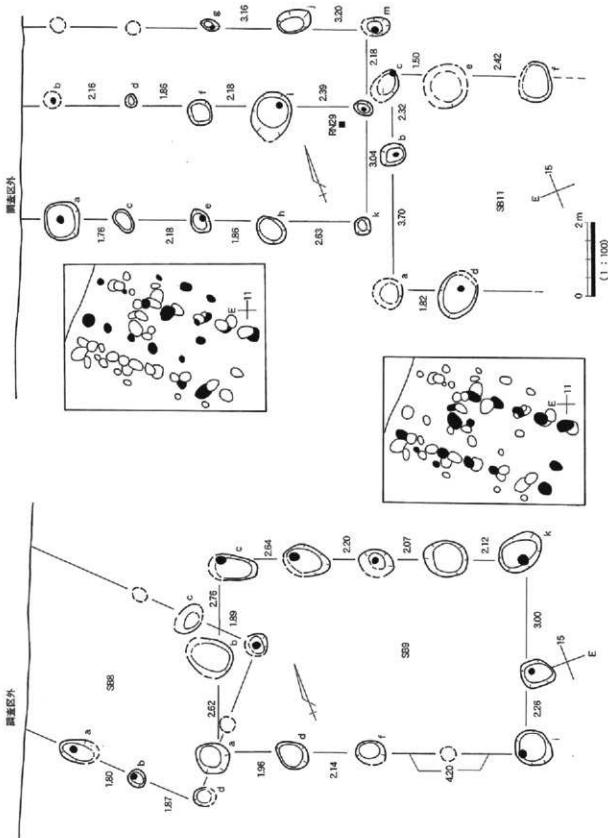
第7図 SB1・2・3



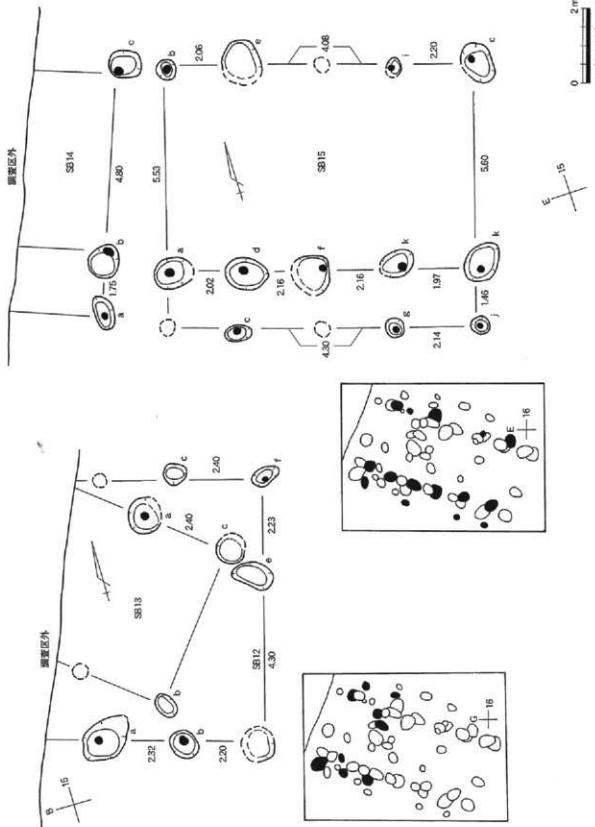
第8図 SB4, SA29



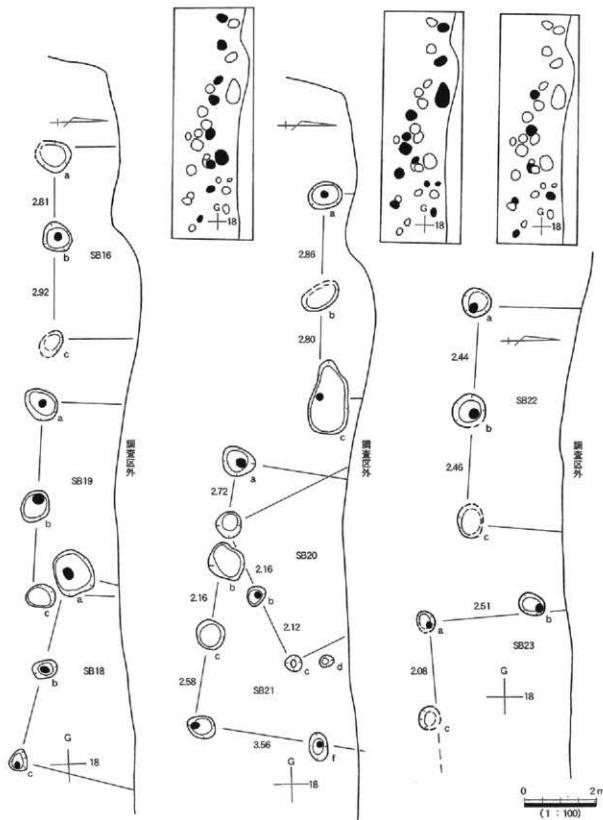
第9図 SB5, SB7・SA6



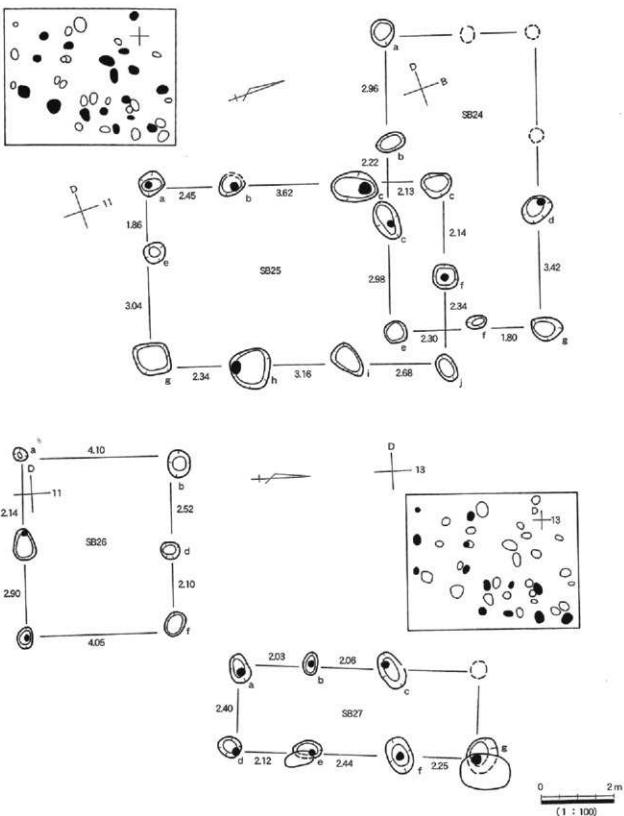
第10図 SB8, 9, 10, 11



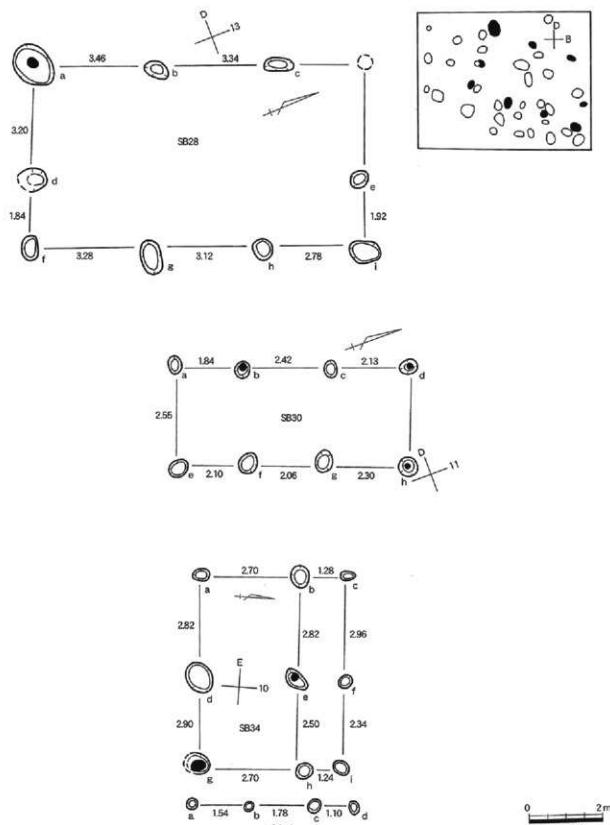
第11図 SB12. 13. 14. 15



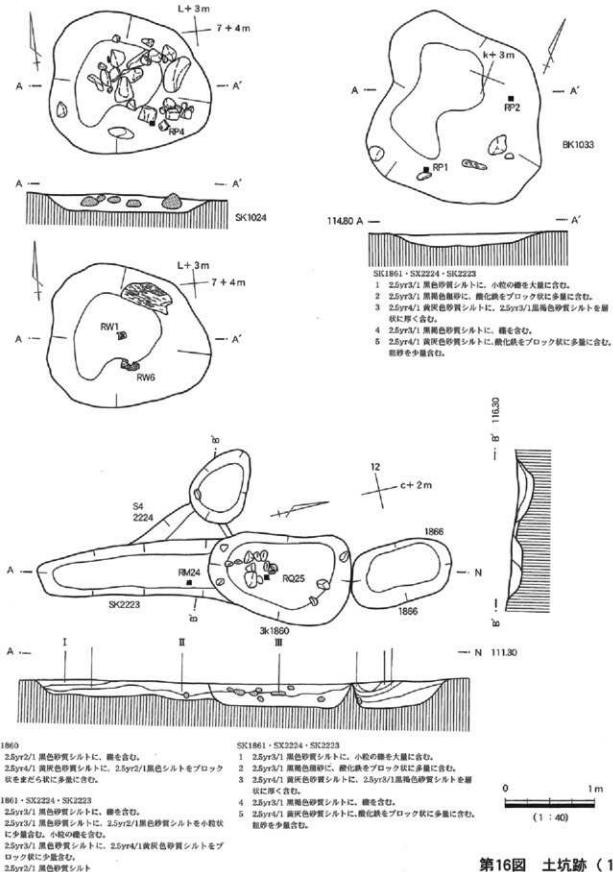
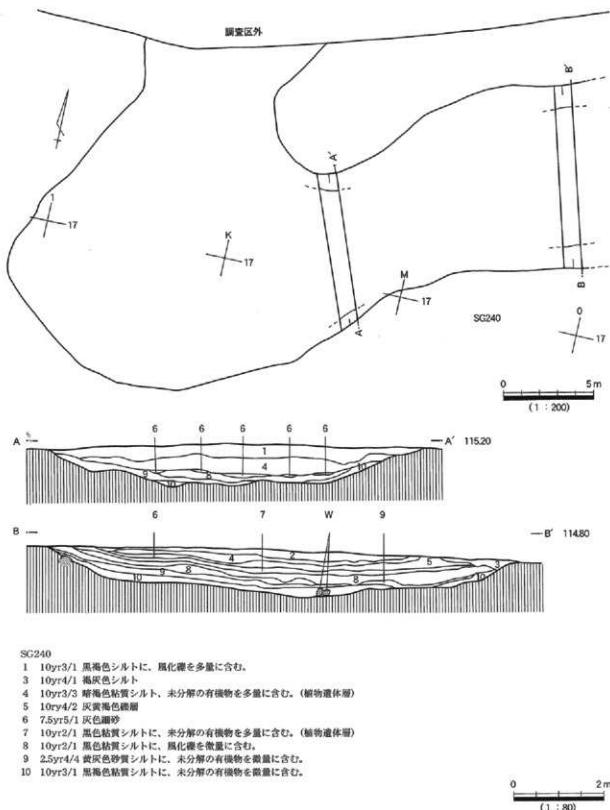
第12図 SB16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23

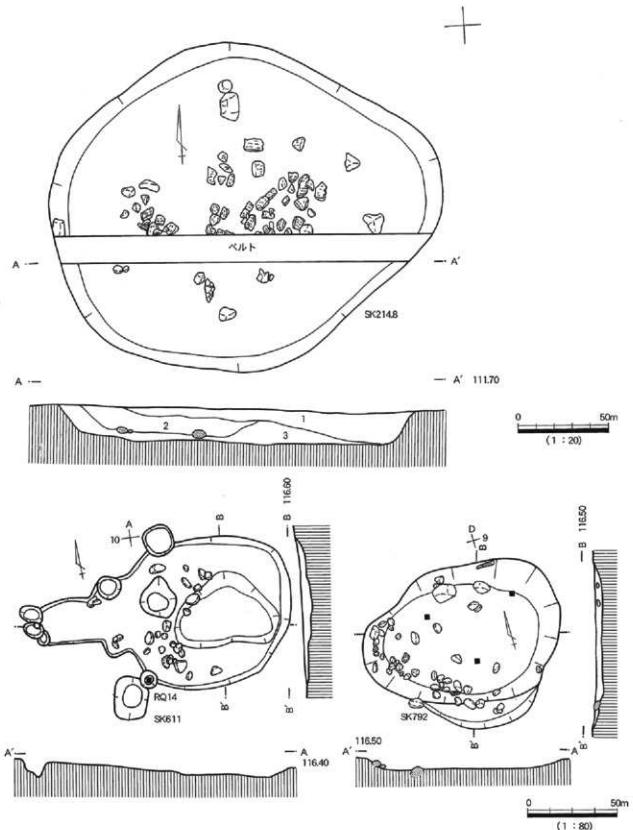


第13図 SB24. 25. 26. 27



第14図 SB28. 30. 34. SA41





第17図 土坑跡（2）

V 出土した遺物

1 陶器（第18～21図、図版9～13、表2・2）

陶器は小碗、皿、鉢、蓋、坏洗、土瓶、壺、擂鉢、盤が出土している。唐津焼、相馬焼、珠洲焼、在地系陶器が出土した陶器の大部分を占めている。小碗（2）は全く同形のものがもう一つ出土しており、高台には「相馬」銘が刻印されている。皿（8）は底部を除いた全体に緑釉が施されており、内側に漆が付していることから漆皿として使用されたものである。鉢（11）は八角皿で瀬戸系御深井焼と酷似しているが、実際には18世紀中ごろに作成された瀬戸焼である。蓋（12）は外側に褐釉が塗られたあとに白釉で草花文が描かれ、内側に灰釉が塗られている。坏洗（13）は全体に白釉がかけられたあとに内側に吳須で草花文が描かれている。壺（17～21）は唐津焼で一般に叩き壺とよばれるものである。内側にはアテ痕が明確に残っており、19・20からはタタキ痕も確認できた。壺は中世陶器（22～26・29）と近世・近代陶器（27・28・30）に分けられる。前者は12世紀中ごろから13世紀に作成された珠洲焼（22～26）と壺系陶器（29）で構成される。珠洲焼には特徴ある条線状タタキ痕と青海波アテ痕が観察でき、壺系陶器は胎土が灰茶色で小石が多く含まれている。後者は在地系陶器（27・28）と唐津焼（30）で構成され、27・28にはそれぞれ亀甲文（27）と雷文（28）が型押しされている。45～48は13世紀から14世紀にかけて中国慈谿窯で作成された綠釉三彩盤である。

2 磁器（第21～24図、図版13～16、表2・3）

磁器は坏、碗、皿、蓋、盤などが出土している。产地は肥前系、在地系で、時代は近世・近代の磁器が大部分を占めている。また中国製磁器は小碗（62・63）、小皿（79）、盤（91・92）が出土しており、そのほとんどは13世紀から14世紀に作成されたものである。坏（49）は外面に「巾」「為」「由」などの草書体しき文字が書かれているのを確認することができる。碗は出土した磁器の中では最も多く、さまざまな種類の碗が出土している。染付碗では、波佐見焼の「くらわんか手」茶碗（56・57・58）や広東型の中碗（68・69）が出土している。56・57は両方とも砂底で外面に二重網目文が描かれているが、碗自体や二重網目文の大きさが異なっており別個の茶碗である。67は見込みに「寿」銘とハリ痕4個あり、焼成不足のため全体に赤みがかったり。青磁碗は近代の有田焼（59・60・61）と13世紀から14世紀の中国龍泉窯青磁（62・63）が出土している。59・60・63には外面にいくつもの線刻が施されている。また14世紀中ごろから後半に作成された瀬戸焼の天目碗（64）が出土している。皿は近世・近代の肥前系や在地系のものが大部分を占める。71は全体に灰釉がかけられており断面に焼接ぎ痕が残り、底部近くにも焼接ぎの隙の溶けた金属が付着している。72は染付皿で縁辺に耕子文が描かれ、見込みが蛇の目釉ハギされている。74は中国製磁器で見込みが蛇の目釉ハギされているが、砂が多く付着しており粗製の皿と考えられる。盤（91・92）は14世紀に中国製の折り縁大盤の口縁部が出土している。そのほかには蓋（87・88）、絵の具皿（89）、花生（90）が出土している。

3 土製品（第24図、図版16、表3）

羽口（93）、コンロの体部（94・95・96）が出土している。94は風口の一部が残存する。

4 織文土器、土師器、須恵器（第25図、図版17、表5・6）

遺構から出土したものはSK2148の織文土器を除いてほとんどなく、多くは包含層からの出土である。織文土器は甕底部（97）と台付甕底部（98）が出土している。しかし表面が摩耗しており、時期は不明である。土師器は高台付鉢（99）が出土している。須恵器は壺（100）、蓋（101）、甕（102・103・104）が出土している。

5 金属製品、錢貨（第25・28図、図版16・17、表5・6）

煙管吸口（105）、鉄滓（106）が出土している。107は根元が角張っており、その部分に木製の柄をはめて使用した工作道具と考えられる。

錢貨は全部で50点出土し、中に粗製の私鑄銭も含まれている。これらのうち状態のよいものは43点あり、その種類と枚数は次のとおりである。唐銭は開元通宝1点のみ出土している。北宋銭は祥符通宝2、天禧通宝4、皇宋通宝2、治平通宝1、嘉祐通宝2、熙寧通宝5、元豐通宝1、元祐通宝5、紹聖通宝2、聖宋通宝2、政和通宝5の35点と出土銭の大部分を占める。明銭は洪武通宝1、永樂通宝5の6点である。また無文銭が1点出土している。第28図42の洪武通宝は背に「浙」の字がある背文字銭である。

6 石器、石製品（第25・26図、図版17・18、表5）

石器は打製石器（108・109）と磨製石器（110・111）が出土している。

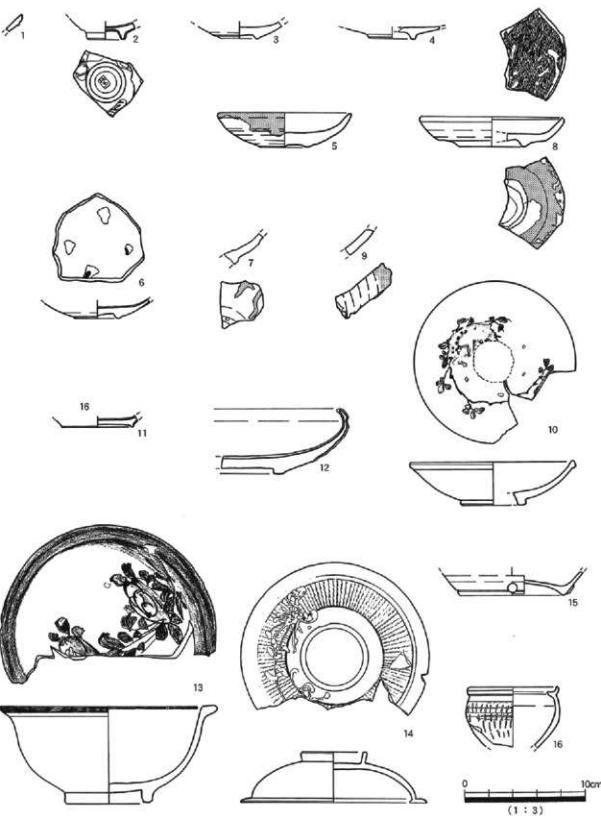
石製品は砥石（112～115）、珪み石（116～119）、とりべ（120・121）、石鉢（122）、礎石（123）が出土している。珪み石は大きさが50mmから100mmを越えるものまで多岐にわたる。とりべは内側を中心に酸化鉄が付着している。礎石は第31図32の柱根の下に敷かれていたもので、柱根底部の炭化加工痕が残存している。

7 木製品（第27図、図版19、表5）

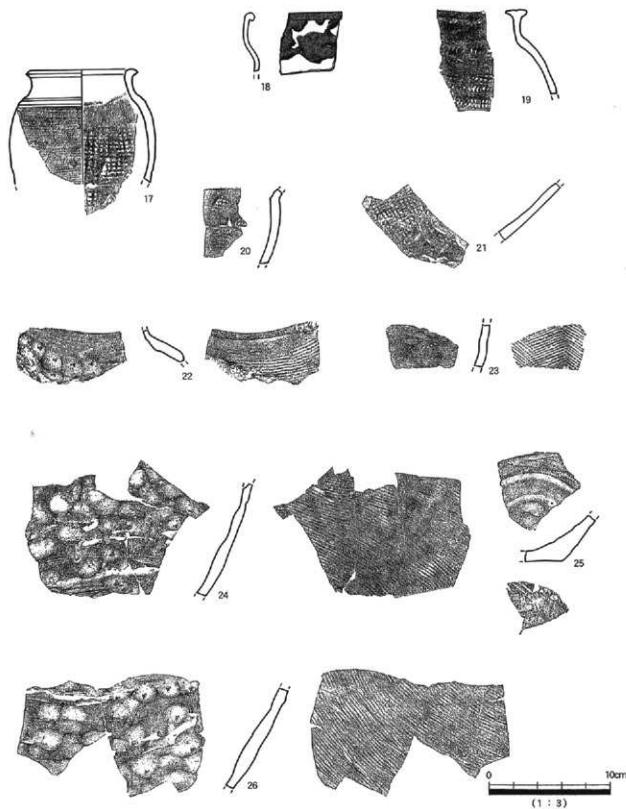
127は直径114mmの円形の板で小樽の底部と思われる。128・129・130はいずれもSK1024から出土しているが、すべて炭化しており状態は極めて悪く用途は不明である。しかし130にはぞ穴らしきものがあることから部材であると思われる。131は石臼の柄でSB11の柱穴cから出土している。

8 柱根（第29～34図、図版20～22、表8）

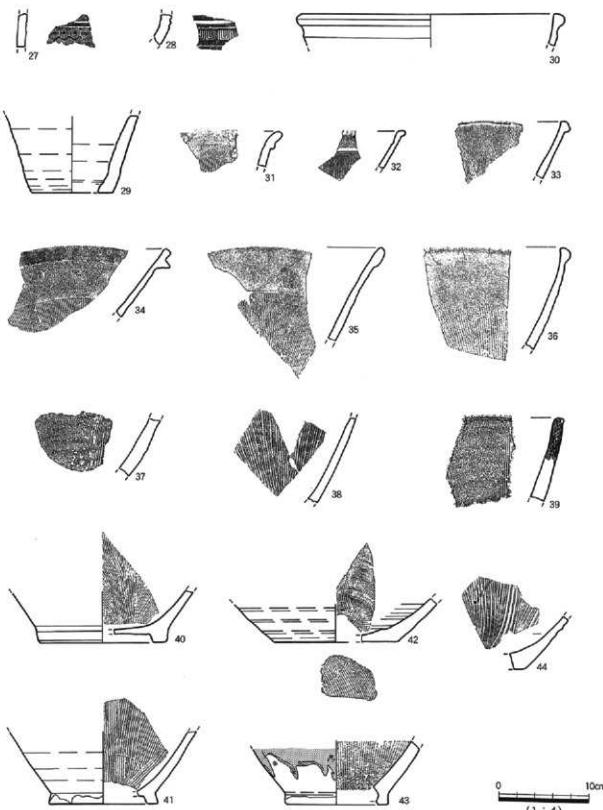
柱根は全部で100本出土しているが、図版の掲載は比較的状態のよい49本にとどめた。柱の直径は12～30cmと多岐におよび、そのほとんどは北西部の掘立柱住居群（SB8～SB15）に集中している。特徴的には表皮と枝をはずしたのみの柱が大部分を占めており、さらに底部がV字もしくは丸い柱と平らな柱とに分類することができた。ほかに角柱（16・17）や全体を鏝で加工された丸柱（13・27・42）が出土している。また多くの柱根に腐食を防止するため底部を焼かれているものがあり、その傾向は直径の大きい底部が平らな柱に多く見られた。また運搬のため溝があるもの（25）や底部に目途穴のあるもの（11・27）などの加工された柱根があった。



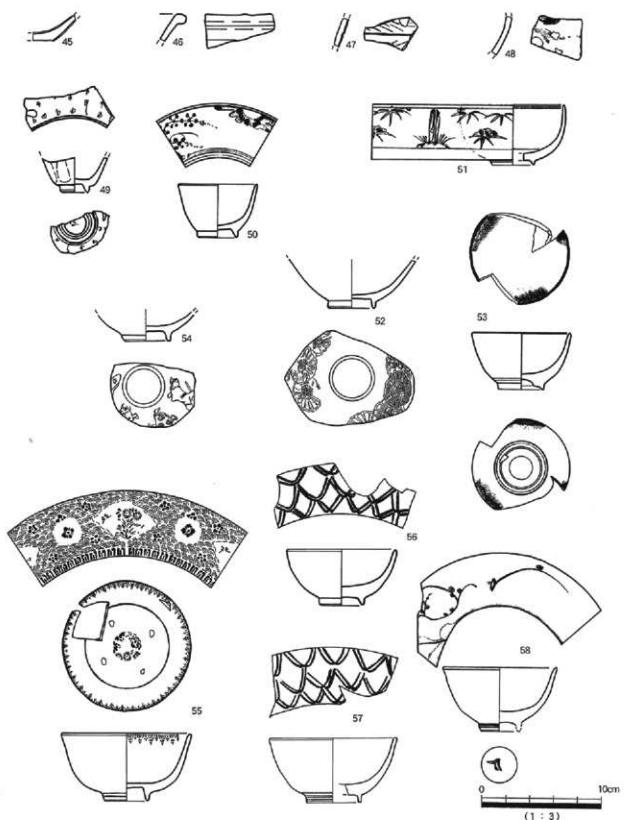
第18図 出土陶器 (1)



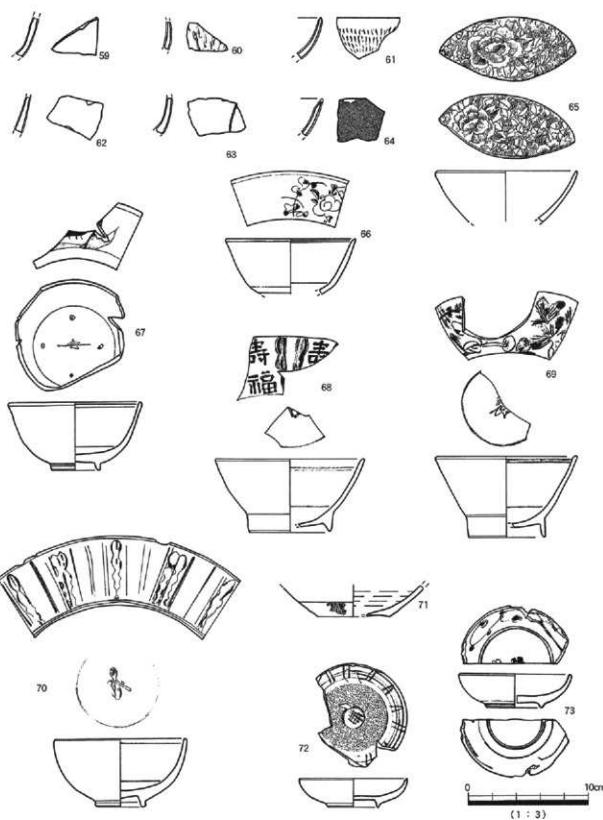
第19図 出土陶器（2）



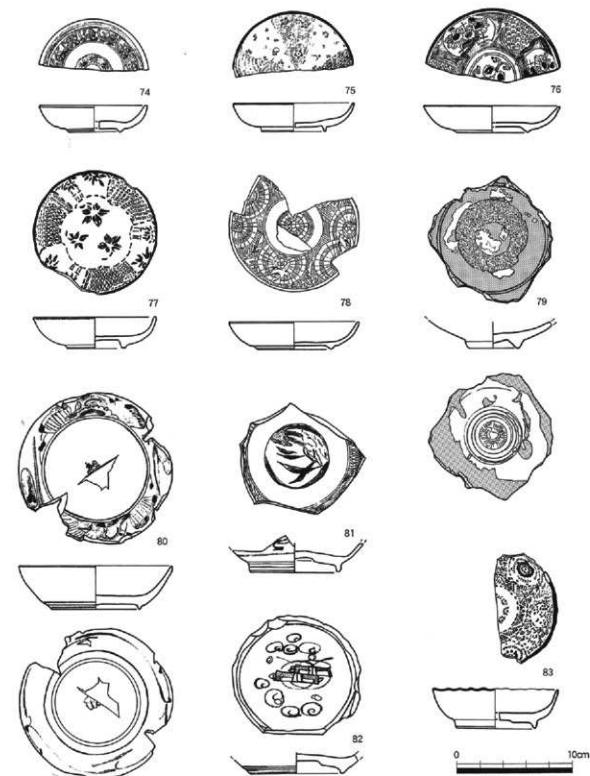
第20図 出土陶器（3）



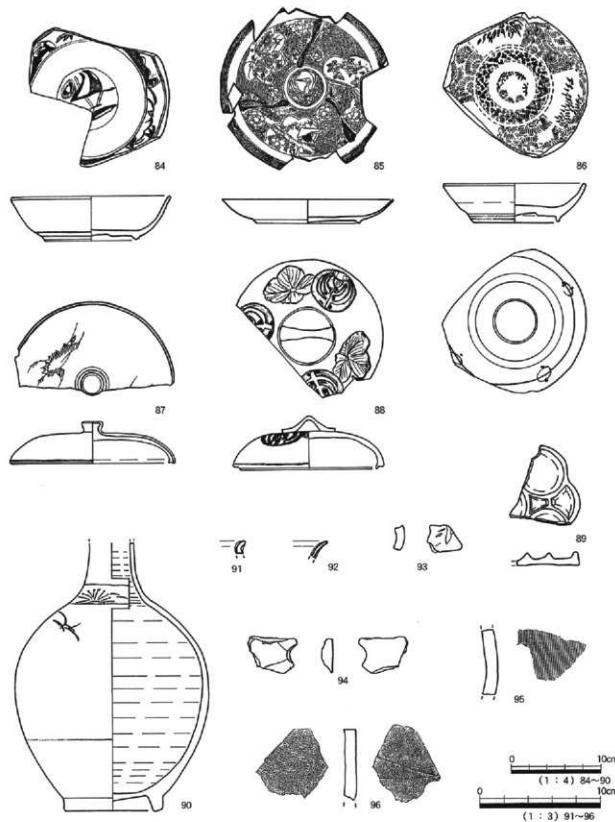
第21図 出土陶器（4）、磁器（1）



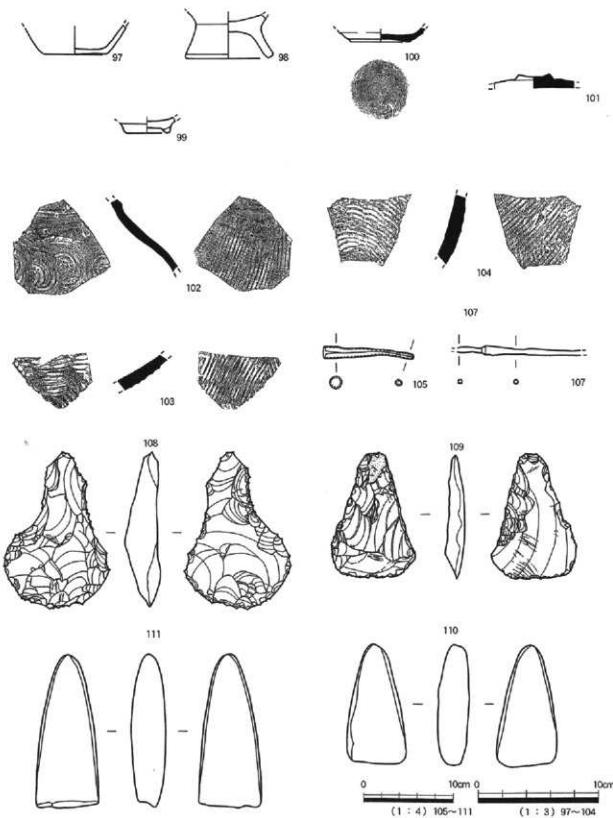
第22図 出土磁器（2）



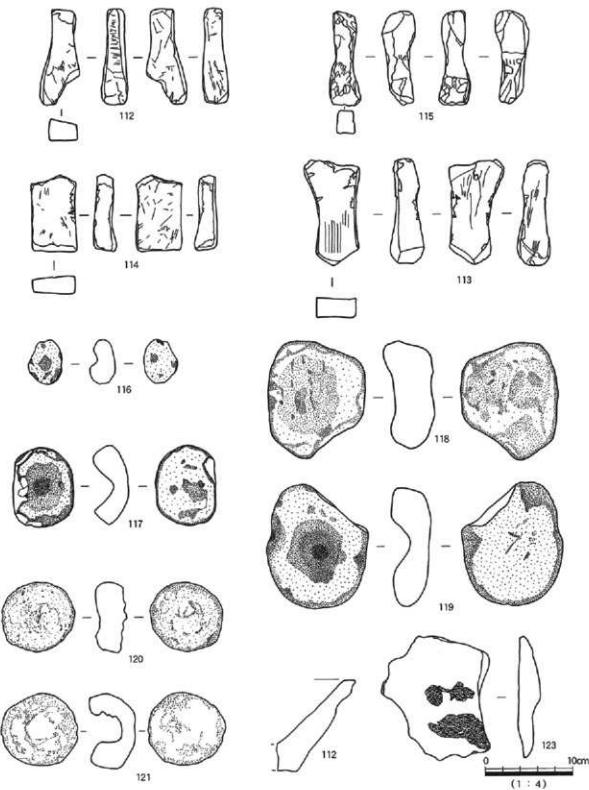
第23図 出土磁器（3）



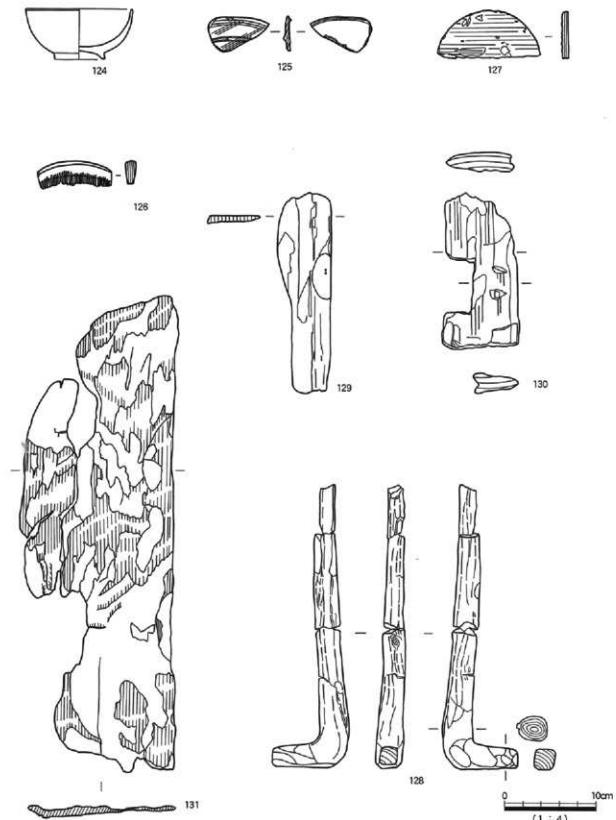
第24図 出土磁器（4）、土製品



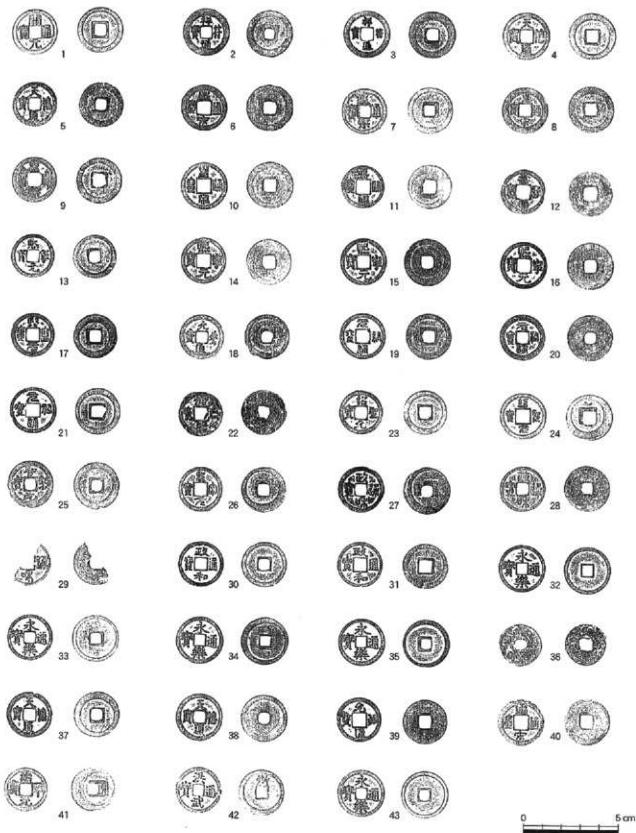
第25図 出土土器・石・金属製品



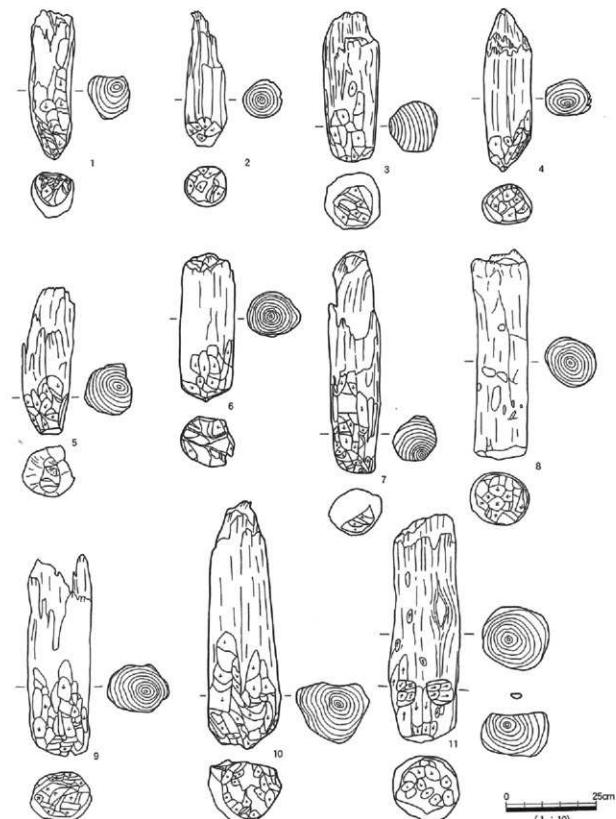
第26図 出土石製品



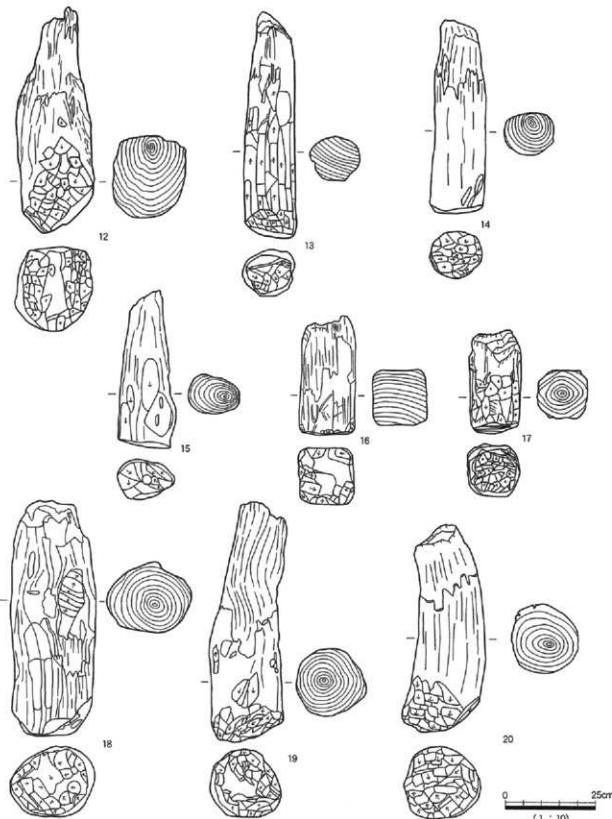
第27図 出土木製品



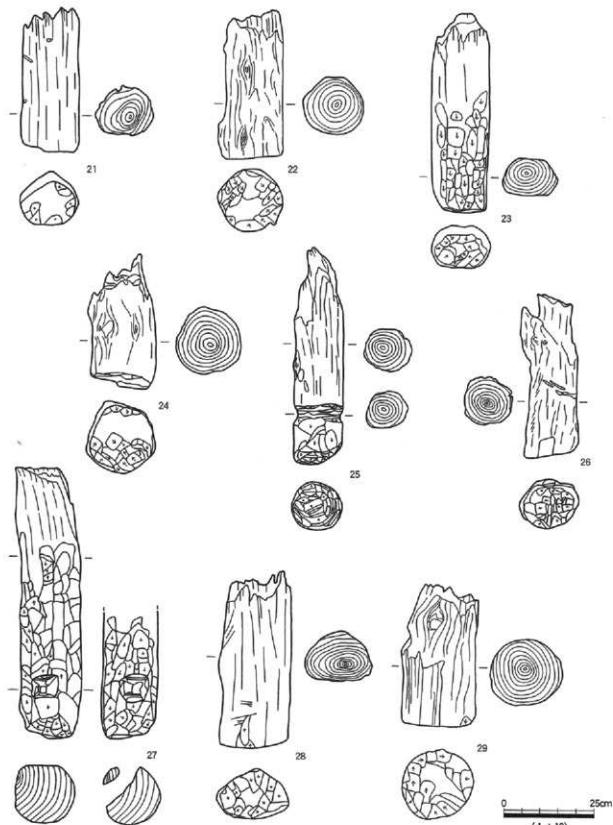
第28図 出土銭貨



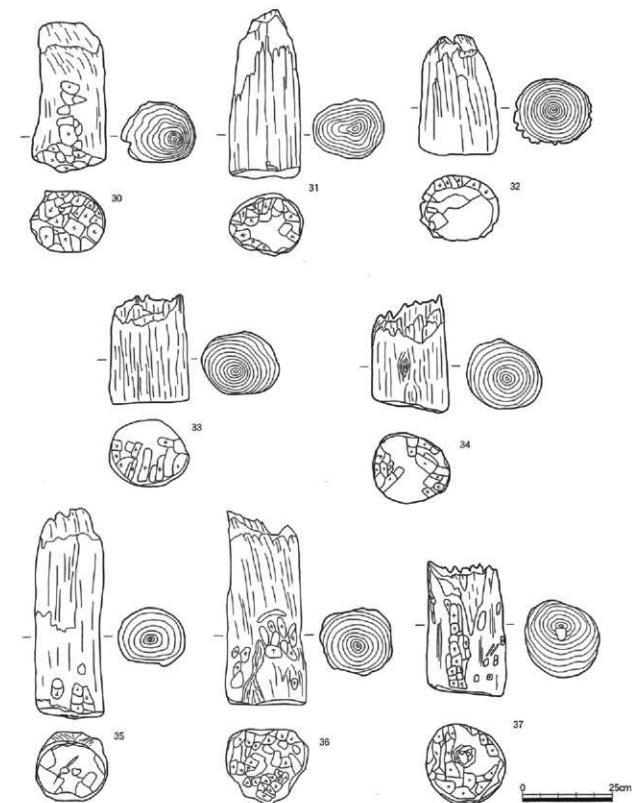
第29図 出土柱根 (1)



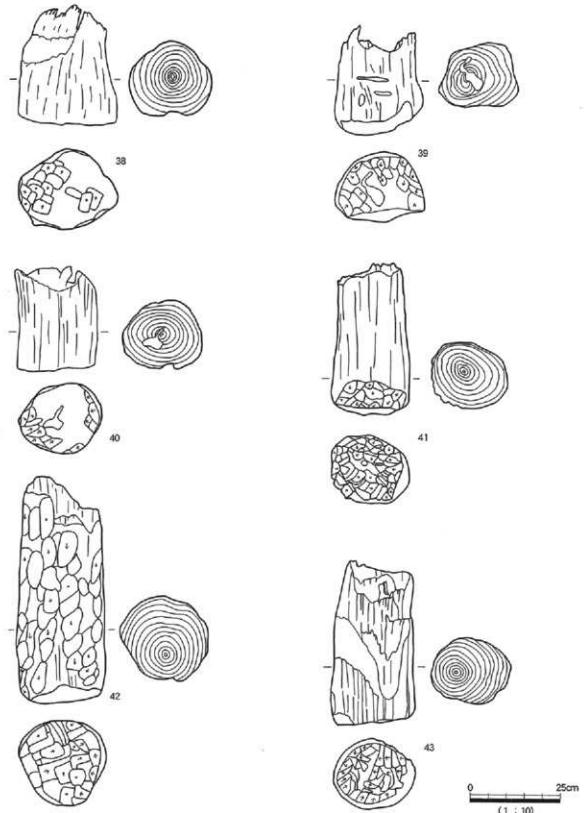
第30図 出土柱根 (2)



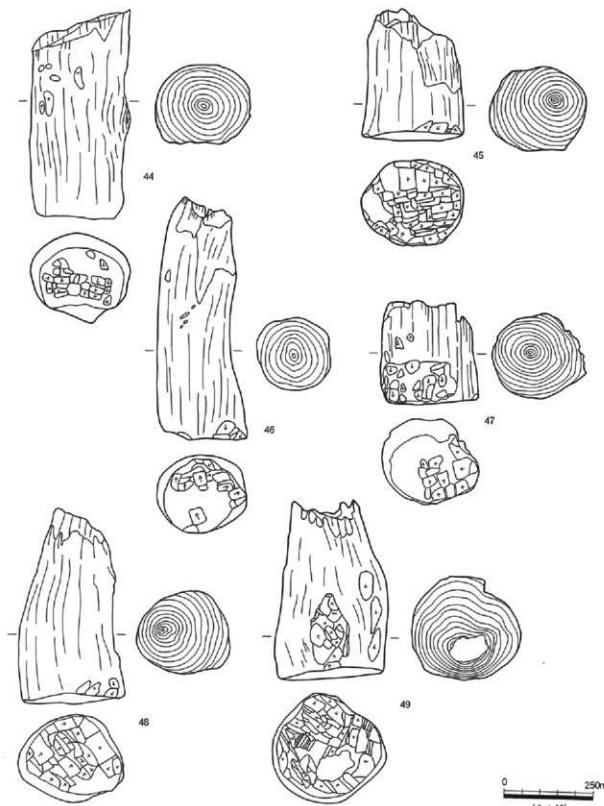
第31図 出土柱根（3）



第32図 出土柱根（4）



第33図 出土柱根 (5)



第34図 出土柱根 (6)

表1 出土陶磁器・土製品観察表(1)

辨認番号	器種	形状特徴	計測値(mm)				胎土色	釉薬	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作地 作年	出土地点
			口径	底径	高さ	厚さ					
1	陶器 小鉢				5	白茶	透明釉	外口クロ底	西側包含層 16世紀		
2	陶器 小鉢		32	6.5	灰	綠釉		大型押し 高台裏・相馬・銘	西側包含層 18~19世紀 相馬		
3	陶器 小皿		(28)	8	褐	内	灰釉	肥前系唐津	西側包含層 16世紀		
4	陶器 小皿		(38)	6	灰	外	灰釉	外口クロ底	16世紀		
5	陶器 小皿	丸型	(112)(41)	28.5	7	灰	外 内	灰釉 灰釉かけ	肥前系唐津	G~8G	
6	陶器 小皿		28	6	褐	内	灰釉	外口クロ底	16世紀末	RP21	
7	陶器 小皿			6	赤茶	外	灰釉	削り出し高台	肥前系唐津	G~15G	
8	陶器 小皿							見込み人跡目	肥前系唐津		
9	陶器 小皿	丸型	(118)(56)	25	4.5	灰	綠釉	燒造感	肥前系唐津		
10	陶器 大皿	丸型	(272)	104	73	6	灰茶	外口クロ底	16世紀初		
11	陶器 不明				(60)	5	白茶	緑釉	内面に漆が付着	D~20G	
12	陶器 豆	角型	224	112	54	7	白茶	灰釉	見込み墨痕	唐戸	
13	陶器 豆	丸型	(180)(73)	78	6.5	褐	白茶	内口クロ底	18世紀中 16~17世紀 染付 内草花文	西側包含層	
14	陶器 豆					内	灰釉	削り出し高台	16~17世紀 相馬		
15	陶器 土瓶				(85)	3	灰	灰釉	外型押し上に白釉で松葉文	西側包含層 相馬	
16	陶器 土瓶							白釉	18世紀末	D~20G	
17	陶器 丸型					5	白茶	表面に煤付着	不明	西側包含層	
18	陶器 丸型					9	赤茶	鐵錫	内アラサ 外口クロ底	17世紀初	
19	陶器 丸型					5.5	赤茶	底部 灰錫	肥前系唐津	西側包含層	
20	陶器 丸型					8	赤茶	内口クロ底 鉄錫	17世紀初 内アラサ	内アラサ 外口クロ底 鉄錫	
21	陶器 丸型					9	赤茶	鐵錫	内アラサ 外カタキ底	17世紀初	
22	陶器 丸型					12	灰	外 一部自然釉	肥前系唐津	G~8G	
23	陶器 丸型					9	灰		12世紀中	RP11	
24	陶器 丸型					12	灰	外 一部自然釉	内アラサ 外カタキ底	12世紀中 22と同一個体?	西側包含層
25	陶器 丸型					15	灰		内口クロ底、上部にアテ痕	12世紀中~後	
26	陶器 丸型							内アラサ 外カタキ底	12世紀	RP15	
27	陶器 丸型					9	青緑	外龜文型押し	在地系 鈴木家 時刻不明	西側包含層	
28	陶器 丸型					11	赤茶	外露文型押し	在地系 鈴木家 時刻不明	F~19G	
29	陶器 丸型					(96)	13.5	灰茶	内アラサ 外口クロ底	12世紀 鈴木家	RP4
30	陶器 丸型	丸型	(300)	7	灰	鐵錫	外口クロ底	肥前系唐津	16~17世紀	西側包含層	
31	陶器 鋼錫					8	青緑	銘目	在地系 時刻不明	西側包含層	
32	陶器 鋼錫					5.5	青緑	口沿 鉄錫	在地系 時刻不明	西側包含層	
33	陶器 鋼錫					7	白茶	自然釉	在地系 時刻不明	西側包含層	
34	陶器 鋼錫					7	灰白	高輪	相馬 (口沿、鉄錫)	江戸後期	G~20G

第18回

第21回

第22回

表2 出土陶磁器・土製品観察表(2)

辨認番号	器種	形状特徴	計測値(mm)				胎土色	釉薬	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作地 作年	出土地点
			口径	底径	高さ	厚さ					
35	陶器 鋼錫						7.5	赤茶	高輪	櫻目	相馬 江戸後期
36	陶器 鋼錫						9	灰茶	高輪	櫻目	西側包含層
37	陶器 鋼錫						13	灰茶	高輪	高輪 櫻目	不明 18世紀
38	陶器 鋼錫						8	褐	透明釉	高輪 外口クロ底	江戸後期
39	陶器 鋼錫						7.5	白茶	高輪	高輪 焼造感	在地系 時刻不明
40	陶器 鋼錫	丸型					14.0	10	赤茶	高輪	相馬 江戸後期
41	陶器 鋼錫						12.2	9	灰	鐵錫	櫻目
42	陶器 鋼錫						22	12.5	灰	高輪	西側包含層
43	陶器 鋼錫						11.6	17	赤茶	外鉄錫かけ	在地系 外口クロ底
44	陶器 鋼錫							10	赤茶	高輪	粗い輪目 時刻不明
45	陶器 鋼錫						5.5	灰	焼造感	高輪 黒色を呈すが、一部銅色の斑 点あり	中國系窯 13~14世紀
46	陶器 鋼錫						5	灰	焼造感	高輪 黒色を呈すが、一部銅色の斑 点あり	中國系窯 13~14世紀
47	陶器 鋼錫						5	灰	焼造感	高輪 黒色を呈すが、一部銅色の斑 点あり	中國系窯 13~14世紀
48	陶器 鋼錫						5	灰	焼造感	高輪 黒色を呈すが、一部銅色の斑 点あり	中國系窯 13~14世紀
49	磁器 壊	角型					2.2	4	白	透明釉	高輪 焼造感あり
50	磁器 壊	丸型	(66)	32	45	4	灰白	青白釉	高輪 片手に秋?文	時刻不明	D~20G
51	磁器 壊	丸型	(86)	36	50	4	白	透明釉	高輪 外口に墨文	1780~1810	西側包含層
52	磁器 小鉢					40	4	白	透明釉	高輪 青白釉	西側包含層
53	磁器 小鉢	丸型	(82)	36	47	4	白	透明釉	高輪 口紅	時刻不明	西側包含層
54	磁器 小鉢					40	4.5	灰白	透明釉	高輪 色斑付	近代
55	磁器 丸型		108	34	57	3	灰白	透明釉	付高輪鉢付	見込竹櫛付	西側包含層
56	磁器 丸型		(92)	38	47	6	灰白	青白釉	縦線付	1750~1770	西側包含層
57	磁器 丸型		(106)	46	54	8	灰白	青白釉	縦線付	1750~1770	西側包含層
58	磁器 丸型		(94)	42	53	4	灰白	青白釉	縦線付	1820~1860	西側包含層
59	磁器 小鉢					5	白	綠釉	青磁	肥前系有田	西側包含層
60	磁器 小鉢					5	白	綠釉	青磁	肥前系有田	西側包含層
61	磁器 小鉢					(68)	4	白	綠釉	青磁	西側包含層
62	磁器 小鉢						6	灰	綠釉	青磁	中国 13世紀代
63	磁器 小鉢						5	灰	綠釉	青磁	中國系窯系
64	磁器 小鉢						5	灰白	鐵錫	天目	14世紀~後
65	磁器 小鉢	丸型	(118)	3	白	透明釉	付付鋼鉢付	外付舟形	時刻不明	肥前 近代	西側包含層
66	磁器 丸型		(110)		4	白	透明釉	青白釉	青白釉	時刻不明	D~20G
67	磁器 中鉢	丸型	(112)	40	57	4	灰茶	透明釉	青白釉	青白釉	近代
68	磁器 中鉢	広口型	(124)	(68)	61	4	青白釉	印あり	青白釉	肥前系	18世紀

第22回

表3 出土陶器・土製品観察表(3)

種類番号	器種	形状特徴	計測値(mm)			胎	釉	装飾印記 染付 文様 その他	製作地 時代	出土地点
			口径	底径	高さ					
第22回	69 磁器 中鉢	広底型 (116) (64)	67	3	白	青白釉	染付 外松竹梅文 印あり	肥前系 18世紀	D-20G	
	70 磁器 中鉢	丸型 (109) 37	57	6	白	透明釉	染付 印あり	肥前系 19世紀		
	71 磁器 丸型	(60)	4	灰白	灰釉	燒錆銀瓶		D-20G		
	72 磁器 丸型	(90) 42	24	3	白茶	青白釉	染付 目輪八宝文 瓶の目輪八宝文	D-20G		
第23回	73 磁器 小皿	丸型 (94) (46)	28	5	灰白	青白釉	染付 西洋コンビニエ 龍雲文など 龍雲文など	D-20G		
	74 磁器 小皿	丸型 (94) (44)	22	5	白	青白釉	染付 見込みハリ皿3個?	E-16G		
	75 磁器 小皿	丸型 (109) (56)	25	4	白	青白釉	内腹墨書きし一粒の目紋の染付 見込みハリ皿4個?	D-20G		
	76 磁器 小皿	丸型 (118) (62)	23	3	白	透明釉	染付 内腹墨書き 色絵刷毛詰付 口虹 見こす意花文 錐彫丸意花文	D-20G		
第24回	77 磁器 丸型	(106) 50	27	4	灰	透明釉	染付刷毛詰付 繩目輪竹文 縹目輪竹文	D-20G		
	78 磁器 丸型	(112) 66	24	4	白	透明釉	染付刷毛詰付 沙波 萩の日・舞・桜文	D-20G		
	79 磁器 小皿		43.5	5	灰白	綠白釉	染付 納豆鉢 外口の直口 見込みに秒付	P-19G		
	80 磁器 中皿	丸型 (132) 74	38	4	灰白	青白釉	染付 五年丸コンビニエ 縹目輪竹文 靴の目輪竹文	D-20G		
第25回	81 磁器 中皿		73	5	白	青白釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	D-20G		
	82 磁器 中皿		80	8	白	青白釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	D-20G		
	83 磁器 中皿	輪花型 (108) (68)	34	3	白	透明釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	D-20G		
	84 磁器 丸型	(132) (76)	38	3	灰白	青白釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	E-16G		
第26回	85 磁器 丸型	(142) 86	20	2	白	透明釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	D-17G		
	86 磁器 丸型	(120) 70	32	5	白	透明釉	染付 納豆鉢 足見斗笠形 見込みに秒付	D-17G		
	87 磁器 丸型	(156)	35	60	白	青白釉	染付 外丸文	D-17G		
	88 磁器 丸型	(126)	44	5	白	青白釉	染付 外柄・桔梗文	D-17G		
第27回	89 磁器 細い具皿		11	9	白	青白釉	3つの蓋で構成 近代	D-17G		
	90 磁器 花生		83	6.5	灰	透明釉	染付 納豆 外文小字	D-10G		
	91 磁器 豆		7	灰	綠釉	有孔 折り続大盤	中国 14世紀	E-16G		
	92 磁器 豆		4	灰	綠釉	有孔 折り続大盤	中国 14世紀			
第28回	93 土器 羽口		9	白茶			在地系 時期不明			
	94 土器 コンロ		12	赤陶			窓口の一部残存 時期不明			
	95 土器 コンロ		11	褐			内縫状の型押し 時期不明			
	96 土器 コンロ		12	赤陶			内口直頭 外口ロココ風、律垂タ斗口			

表4 出土土器観察表

種類番号	種別	種類	計測値(mm)			胎土色	底部形成	技 法		備考	出土地点
			口径	底径	高さ			外 面	内 面		
97 磁文土器 鈴			70	5	高						西側包含層
98 磁文土器 高台付鉢			(96)	8.5	高						高台部分のみ残存 西側包含層
99 上土器 高台付鉢			52	17	5	白茶		凹面切り	ロクロ底	ロクロ底	RP-1
100 磁器 頸	年		68	4	灰						J-15G
101 磁器 盖			(383)	8.5	灰						G-14G
102 磁器 便				8	灰						RP-1
103 磁器 便				11	灰						C-14G
104 磁器 便				18	灰						東側包含層

表5 出土金属製・石製品・木製品観察表

種類番号	種別	計測値(mm)			出土地点	種類番号	種別	計測値(mm)			出土地点
		長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ	
105 磁管吸口		75	8		E-14G	119 磁み石		長さ	幅	高さ	F-15G
106 鉄斧					SK1860-F	120 とりべ		長さ	幅	高さ	I-15G
107 不明	(103)	7			RM110	121 とりべ		長さ	幅	高さ	RQ18
108 打鑿石器		128	86	28	D-17G	122 石鉢		口径	腹	厚さ	西側包含層
109 打鑿石器		104	69	15	D-17G	123 亂石		長さ	幅	高さ	RQ14
110 打鑿石器	(100)	48	26		西側包含層	124 磨器機		口径	腹	高さ	西側包含層
111 打鑿石器		127	52	29	西側包含層	125 磨器機?		口径	腹	高さ	西側包含層
112 砥石		109	46	29	G-10G	126 鋼		長さ	幅	厚さ	RW29
113 砥石		108	33	34	G-10G	127 小細部		長さ	幅	厚さ	J-15G
114 砥石		86	51	23	RQ25	128 部材?		長さ	幅	厚さ	RW7
115 砥石		116	63	30	G-10G	129 部材?		長さ	幅	厚さ	RW6
116 磁み石		51	36	35	F-10G	130 部材?		長さ	幅	厚さ	RW5
117 磁み石		(91)	(79)	28	F-10G	131 白石の柄		長さ	幅	厚さ	RW26
118 磁み石		134	112	87.5	G-11G						

表6 出土錢貨観察表(1)

種類番号	錢貨名	書体	国名	初 鋸 年	性	厚さ	出土地点	種類番号	錢貨名	書体	国名	初 鋸 年	性	厚さ	出土地点	
1 元開通宝	唐	621	24.4	L1				17 唐開元通宝	篆書	北宋	1063	23.2	1.5			
2 鋅背通宝	北宋	1009	24.5	L2				18 元豐通宝	行書	北宋	1078	23.7	1.1			
3 神符通宝	北宋	1009	25.1	L3				19 元祐通宝	篆書	北宋	1086	24.1	1.3			
4 大观通宝	北宋	1017	23.9	L4				20 宣和通宝	篆書	北宋	1086	24.6	1.2			
5 乾祐通宝	北宋	1017	23.9	L5				21 元祐通宝	篆書	北宋	1086	24.6	1.2			
6 乾祐通宝	唐	1038	24.4	L2				22 元祐通宝	篆書	北宋	1086	23.7	1.1			
7 乾祐通宝	唐	1038	24.3	L3				23 熙寧元宝	行書	北宋	1094	23.2	1.2			
8 乾祐通宝	唐	1038	24.3	L4				24 嘉祐元宝	篆書	北宋	1094	24.7	1.3			
9 早朝通宝	唐	1038	24.1	L1				25 嘉祐元宝	篆書	北宋	1101	24.7	1.1			
10 早朝通宝	唐	1038	24.7	L2				26 聖宋元宝	篆書	北宋	1103	23.9	1.1			
11 嘉祐通宝	宋	1056	23.0	L1				27 政和通宝	篆書	北宋	1111	24.4	0.8			
12 嘉祐通宝	宋	1056	23.7	L0				28 政和通宝	篆書	北宋	1111	24.4	1.0			
13 熙寧元宝	宋	1068	23.4	L3				29 政和通宝	篆書	北宋	1111	23.9	1.0			
14 熙寧元宝	宋	1068	24.1	L2				30 政和通宝	分母	北宋	1111	23.9	1.2			
15 熙寧元宝	宋	1068	24.7	L2				31 政和通宝	分母	北宋	1111	24.2	1.3			
16 熙寧元宝	宋	1068	24.9	L1				32 水通宝	明	1408	24.5	1.3				

表7 出土銭貨観察表(2)

辨認番号	銭貨名	書体	国名	初鋲年	径	厚さ	出土地点	辨認番号	銭貨名	書体	国名	初鋲年	径	厚さ	出土地点
33	永樂通宝	明	1408	24.6	1.4			39	天祐通宝	篆書	北宋	1086	23.7	1.5	RM17
34	永樂通宝	明	1408	25.0	1.4		RM16	40	昌平元宝	真書	北宋	1038	24.7	1.3	
35	永樂通宝	明	1408	24.7	0.9			41	昌平元宝	真書	北宋	1084	23.4	1.2	RM19
36	無文	不明		22.0	1.1			42	永樂通宝	真書	明	1368	24.2	1.2	
37	天祐通宝	北宋	1017	22.2	1.8			43	永樂通宝	明	1408	24.5	1.5	西側包含層	
38	天祐通宝	北宋	1017	24.8	1.0		RM17								

表8 出土柱根観察表

辨認番号	No.	出土地点	計測値(cm)			断面加工	底盤加工	備考
			最大径	最小径	長さ			
1	SB1	b	12	41	一部 V字			
2	SB27	a	12	38	無し V字			
3	EP558		15	41	無し V字			
4	EP188		13	45	無し V字			
5	EP1273		18	41	一部 V字			
6	EP2118		15	41	一部 丸			
7	EP1542		15	10	81	一部 V字		
8	SB24	c	14	55	無し V字			
9	SB4	o	17	56	無し V字			
10	EP145		20	68	無し V字			
11	SB8	a	18	60	一部 V字			
12	SB9	k	23	62	無し V字			
13	EP1000		14	53	全周 平			
14	SB21	e	14	55	無し 平			
15	SB27	f	14	10	43	一部 V字		
16	SB1	f	15	31	全周 平			
17	SB2	c	14	28	全周 平			
18	SB9	c	23	66	無し V字			
19	SB9	e	19	67	一部 V字			
20	EP182		20	58	無し V字			
21	EP181		16	40	無し 平			
22	EP151		18	40	無し 平			
23	EP2179		15	54	一部 V字			
24	EP1171		18	57	無し 平			
25	EP610		13	59	一部 丸			
26	EP1566		17	45	無し V字			
27	SB4	e	17	75	全周 平			
28	EP199		19	49	無し V字			
29	EP2151		20	39	無し V字			
30	SB15	c	21	42	無し V字			
31	EP1653		20	47	無し V字			
32	EP628		22	34	無し V字			
33	SB21	a	21	30	無し V字			
34	SB20	b	21	30	無し V字			
35	EP176		18	59	無し V字			
36	SB15	h	20	55	一部 V字			
37	SB16	b	22	38	一部 V字			
38	EP150		17	46	無し V字			
39	SB9	i	22	30	無し V字			
40	SB10	i	22	29	無し V字			
41	SB15	k	21	17	42	無し V字		
42	SB14	c	24	68	全周 平			
43	SB19	a	22	20	45	無し V字		
44	EP152		27	58	一部 V字			
45	SB22	b	27	37	無し V字			
46	SB15	n	21	88	無し V字			
47	EP940		26	29	一部 V字			
48	SB13	a	26	55	無し V字			
49	SB22	a	30	50	一部 V字			

VI まとめ

調査では、中世の掘立柱建物跡と考えられる多数の建物跡と2,000基を越える柱穴、土坑、河川跡などが検出された。遺物は、現況の水田の畦畔直下を中心に、油脂箱で10箱ほどで、繩文土器から近世の陶磁器まで幅広い年代の遺物が出土している。また、建物に使用されていた柱根も数多く出土している。以下に遺構、遺物について記述する。

遺構 今回の調査では約2,000基の柱穴が検出された。しかし、当時の人々の住まいである掘立柱建物跡を構成することは非常に困難であった。現地調査段階では、10数棟に構成された掘立柱建物跡を確認したが、調査後に検討を加えると、かなりの確率で見直しを迫られるものがあった。また、建物として組み合わせることができなかった柱穴についても問題があり、根城の調査を実施した八戸市博物館の佐々木氏に建物の構成について指導・助言を賜り、まとめに調査担当として現段階の結論を述べ、掘立柱建物跡の図上復元する作業に取り組み、その試験を次頁に示した。なお、その作業手順の基本的な考え方方は、下記の通りである。

現地調査段階

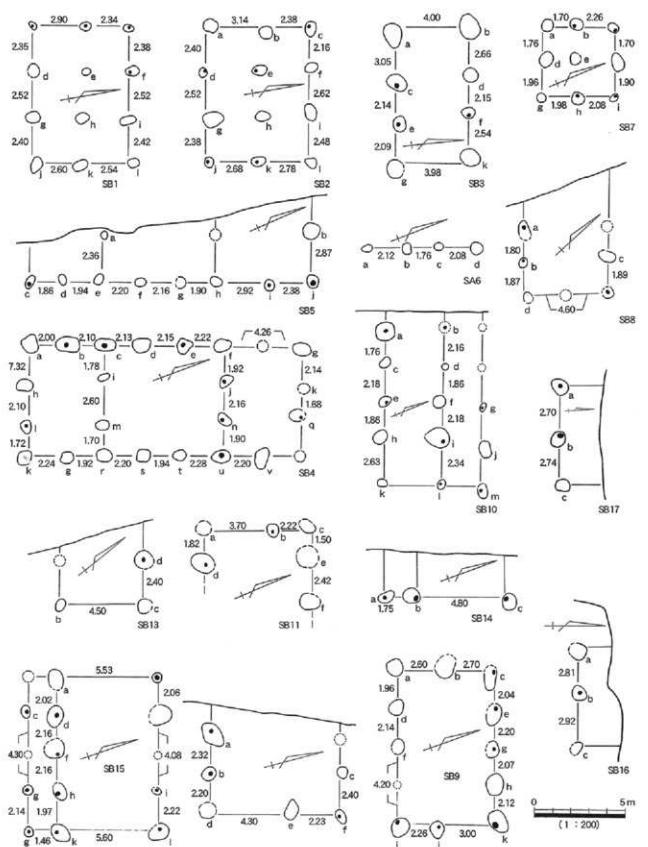
- ・柱穴を半載する前に、アタリの位置を確認する。確認面で確認できない場合は柱穴内の覆土を少しずつ下げて、徹底的に探していく。
- ・できる限り現場で建てたい。建物を建てたときに、柱があるかないかで間取りが違ってしまう。ないのか、あったかもしれないのか、見つけられなかつたのかの判断をする。
- ・柱穴が完掘したら、アタリ部分を確認。(土色変化、光り具合、手触り等で)

調査終了後

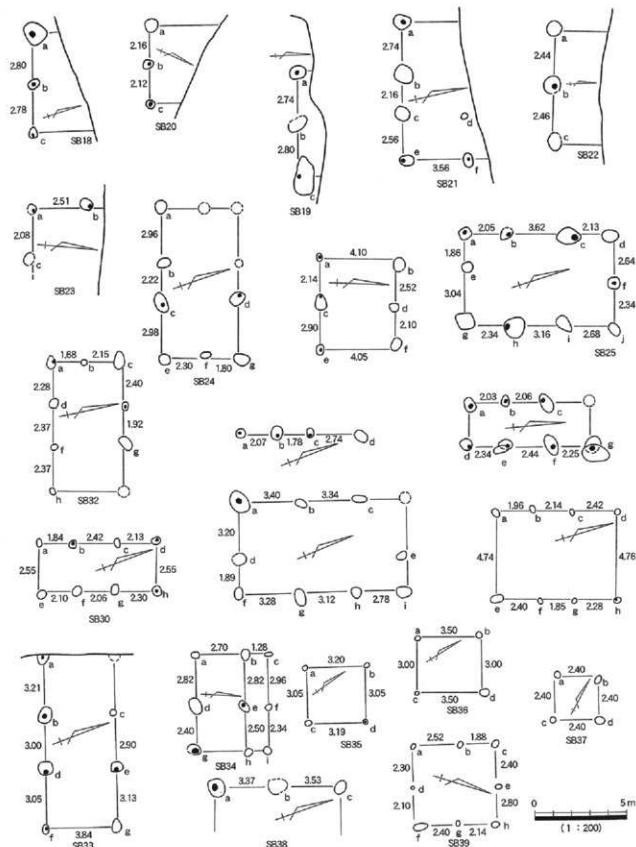
- ・百分の一の造構配置図に残存する柱やアタリをプロットし、図上で建物を建てる。(図上には上場の線と、アタリの線を入れる。)
- ・何人かで建ててる場合、お互いが建てたものを突きあわせて同じものはそのまま決定する。残った柱穴を利用して、また同じ作業を繰り返す。そして、また検討する。の繰り返し。
- ・建物が建ったら、新旧関係を検討し、遺物などから考えられる時期に合わせて、掘立柱建物跡を配置する。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、破片ではあるが、明代の龍泉窯の陶器や慈窯の三彩綠釉盤など地方領主が権勢をふるっていた当時を伺わせる遺物も数点出土している。時代的には、繩文時代から近世までと非常に幅広い。調査区周辺には、繩文時代の遺跡が数多く立地している。現に調査区南側の高台にある畠からも繩文土器が出土していることから、これらの繩文時代の遺物は、付近の遺跡から流れ込んだものと考えられる。また、出土状況を見ると、現況の水田の畦畔の下からの出土が大部分を占め、ほ場を整備していく過程で搬築された可能性が強い。その反面、遺構内からの出土が少なく、個別の遺構の年代を特定することが難しい。

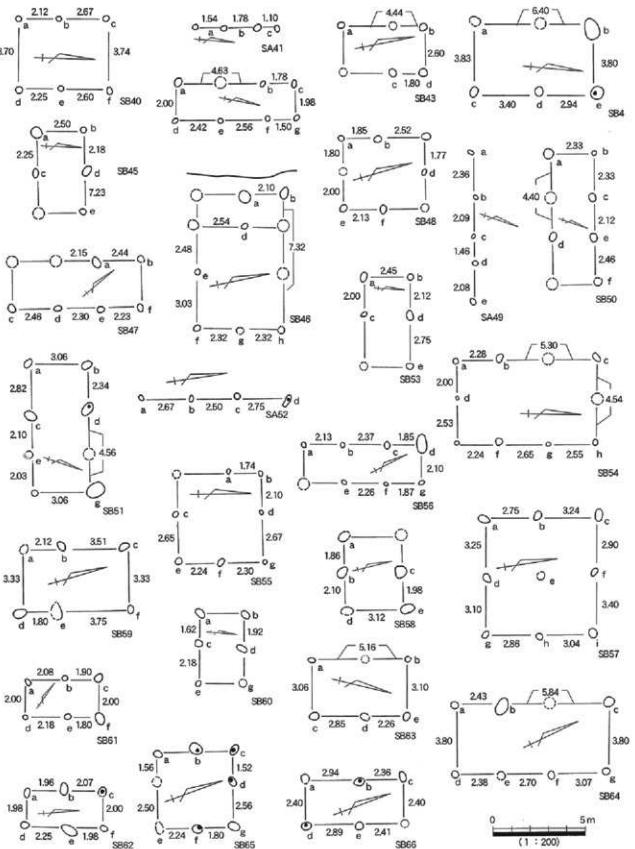
出土した柱根は、100本を数える。紙面の関係で全て掲載することはできなかったが、形態から大別して代表的なものを掲載した。現在の住宅に使用されるような加工を施された角柱から、伐採したときの状況を色濃く残す丸柱まで、建物の性質や用途などによって加工の仕方や太さなど相違があり、今後の比較資料となる。



第35図 掘立柱建物跡（1）



第36図 捩立柱建物跡（2）



第37図 挖立柱建物跡（3）

表9 出土柱根觀察表（1）

柱根 住居 号	掘り方	柱 重	被 留 量	柱 根 形	住 居 号	掘り方	柱 重	被 留 量	柱 根 形	住 居 号	掘り方	柱 重	被 留 量
a	50×31	21	28×13	22	u	102×62	21	28×26	27	c	12	14×14	10
b	55×47	40	13×11	26	v	103×69	27	-	-	S	d	10×100	22
c	54×38	24	15×14	30	w	47×44	12	-	-	B	e	-	-
d	71×17	16	-	-	x	45×35	-	-	-	G	f	113×3	-
e	50×37	23	-	-	y	72×44	23	22×22	30	H	z	150×102	14
f	72×56	27	20×20	27	d	53×42	16	-	-	S	b	64×58	34
g	81×59	20	-	-	e	52×48	23	-	-	B	c	80×74	32
i	87×44	21	-	-	f	53×49	30	-	-	I	g	116×70	19
j	93×55	21	-	-	h	65×52	22	-	-	L	i	79×46	22
k	90×62	27	-	-	i	68×52	13	17×17	32	S	j	80×46	32
l	63×48	34	-	-	j	68×68	29	22×28	32	B	k	86×56	29
a	80×66	18	-	-	l	70×48	11	-	-	I	m	70×68	11
b	70×65	14	-	-	m	57×35	24	-	-	C	n	81×11	-
c	81×62	24	14×14	16	n	63×34	13	-	-	S	a	95×49	30
d	79×43	22	16×14	22	s	50×39	18	-	-	B	b	99×59	47
e	74×49	14	20×16	22	t	68×64	21	-	-	A	c	92×70	48
f	73×50	25	-	-	u	69×56	40	-	-	I	d	105×82	42
g	120×82	54	-	-	v	69×65	23	17×16	-	S	e	54×47	44
h	75×61	26	-	-	w	59×50	27	16×16	30	B	f	68×48	25
i	85×64	31	-	-	x	62×92	27	-	-	I	g	122×88	27
J	56×48	17	16×14	29	y	59×64	15	-	-	S	h	32×23	25
k	74×50	29	19×17	30	z	58×30	16	-	-	I	i	<113	23
l	67×40	28	-	-	h	70×66	21	16×16	26	S	j	52×47	29
a	122×101	9	-	-	i	48×28	21	15×14	25	B	k	100×68	23
b	136×116	7	-	-	j	62×62	9	20×16	12	I	l	54×88	24
c	114×92	20	20×18	8	k	46×44	10	14×12	10	S	m	50×49	9
d	80×74	12	-	-	l	60×24	22	22×14	-	B	n	115×86	29
e	76×72	30	20×20	32	m	88×48	40	-	-	I	o	114×84	22
f	70×59	10	-	-	n	60×24	22	22×14	-	S	p	80×80	49
g	102×25	25	-	-	o	88×48	40	-	-	B	q	55×35	-
h	110×96	10	-	-	p	88×23	-	-	-	I	r	90×90	27
a	46×46	10	16×12	13	q	136×92	33	28×20	-	S	s	92×78	17
b	78×62	20	19×18	28	r	135×85	26	-	-	B	t	32×30	40
c	47×34	13	21×18	21	s	122×84	37	25×20	-	I	u	130×111	35
d	80×52	34	-	-	t	85×39	-	-	-	S	v	68×50	28
e	96×44	37	-	-	u	98×-19	18×18	10	-	B	w	59×50	14
f	125×78	45	23×20	48	v	110×97	26	-	-	I	x	96×76	26
g	117×65	42	30×25	42	w	104×93	36	24×19	28	S	y	116×X	-11
h	97×72	48	-	-	x	95×73	28	16×16	23	B	z	210×99	5
e	89×80	64	21×20	69	y	134×94	35	32×32	-	I	aa	72×70	48
f	96×70	39	-	-	z	106×94	22	22×20	22	S	bb	62×52	32
g	93×64	29	-	-	aa	72×46	16	-	-	B	cc	50×45	7
h	96×62	29	-	-	bb	34×29	22	-	-	I	dd	89×89	17
i	68×40	37	-	-	cc	67×52	14	16×14	-	S	ee	100×90	18
j	82×70	22	20×17	24	dd	52×32	22	-	-	B	ff	82×82	16
k	70×56	32	-	-	ee	50×28	21	12×10	-	I	gg	45×33	29
l	80×67	25	21×19	27	ff	82×68	16	-	-	S	hh	82×60	50
m	78×55	27	-	-	gg	130×110	-	19×17	-	B	ii	77×52	22
n	88×50	23	21×19	27	hh	96×82	14	-	-	I	jj	96×88	35
o	76×68	36	20×20	-	ii	89×89	17	28×20	14	S	kk	29×23	33
p	96×76	29	-	-	jj	49×40	-	-	-	B	ll	-	-
q	73×65	36	-	-	kk	54×39	33	15×15	-	I	mm	60×48	8
r	86×69	27	-	-	ll	>50	-	20×14	18	S	nn	75×59	10
s	73×64	22	-	-	mm	75×62	15	-	-	B	oo	65×66	11
t	75×62	26	-	-	nn	74×61	20	16×14	12	I	pp	-	-

表10 出土柱根観察表(2)

標 印 番 号	住居 番 号	掘り方	柱 痕		標 印 番 号	住居 番 号	掘り方	柱 痕		標 印 番 号
			大きさ	深さ				大きさ	深さ	
S B 24	a	76×63 35	-	-	S	a	33×27 33	-	-	S
	b	81×48 30	-	-	S	b	33×36 24	-	-	B
	c	113×69 30	20×18 50	45	S	c	42×35 17	-	-	41
	d	86×68 45	21×21 45	-	S	d	38×36 15	-	-	
	e	66×62 32	-	-	S	a	45×39 9	-	-	
	f	56×36 27	-	-	S	b	42×33 6	-	-	
	g	90×62 17	-	-	S	c	×25 -	-	-	
	a	73×70 26	18×15 24	-	S	d	30×29 9	-	-	
S B 25	b	74×61 16	25×22 16	-	S	e	71×40 15	-	-	
	c	132×82 30	35×32 45	-	S	f	29×19 16	-	-	
	d	83×65 22	-	-	S	g	24×22 21	-	-	
	e	63×53 13	-	-	S	h	40×30 30 10×9 15	-	-	
	f	70×70 30	20×20 -	-	S	i	54×40 11 24×22 24	-	-	
	g	116×100 18	-	-	S	j	34×34 15	-	-	
	h	116×112 26	36×25 32	-	S	k	98×57 20	-	-	
	i	102×66 11	-	-	S	l	49×55 12	-	-	
S B 26	j	77×48 17	-	-	S	m	52×37 -	37 12×10 26	-	
	a	43×34 16	15×14 -	-	S	n	37×33 17	-	-	
	b	74×60 30	-	-	S	o	89×57 25	-	-	
	c	85×64 12	16×16 18	-	S	p	42×29 13	-	-	
	d	55×47 31	-	-	S	q	66×- 21 15×15 21	-	-	
	e	58×42 8	15×13 22	-	S	r	92×74 16	23×23 29	-	
	f	72×53 21	-	-	S	s	42×38 26	-	-	
	g	81×60 30	22×18 15	-	S	t	77×75 31 32×29 27	-	-	
S B 27	b	63×39 25	18×18 40	-	S	u	81×61 18 26×26 15	-	-	
	c	106×58 31	22×18 30	-	S	v	48×40 25 20×17 25	-	-	
	d	65×59 31	22×22 31	-	S	w	72×- 27	-	-	
	e	81×35 33	18×18 30	-	S	x	25×25 10	-	-	
	f	102×65 20	20×20 35	-	S	y	35×38 30	-	-	
	g	83×- 76	25×26 60	-	S	z	39×34 30	-	-	
	a	133×98 45	30×26 32	-	S	aa	29×29 8 14×14 8	-	-	
	b	68×42 27	-	-	S	ab	32×27 17	-	-	
S B 28	c	80×35 22	-	-	S	ac	35×35 13	-	-	
	d	62×36 30	-	-	S	ad	22×22 13	-	-	
	e	58×46 11	-	-	S	ae	40×40 23 -	-	-	
	f	70×44 23	-	-	S	af	35×31 16	-	-	
	g	97×58 22	-	-	S	ag	49×30 23	-	-	
	h	60×58 30	-	-	S	ah	34×34 13	-	-	
	i	90×63 10	-	-	S	ai	50×41 15	-	-	
	j	36×26 30	-	-	S	aj	127×85 36 25×25	-	-	
S B 29	b	32×30 20	18×16 20	-	S	ak	98×92 13	-	-	
	c	34×26 19	-	-	S	al	67×57 9	-	-	
	d	44×30 21	16×16 -	-	S	am	32×22 -	-	-	
	e	56×46 10	-	-	S	an	35×25 -	-	-	
	f	70×41 19	24×24 19	-	S	ao	50×37 -	-	-	
	g	38×44 9	-	-	S	ap	20×20 -	-	-	
	h	40×27 17	37×28 -	-	S	aq	39×30 8	-	-	
	i	42×40 16	-	-	S	ar	36×26 10	-	-	
S B 30	j	45×36 10	-	-	S	as	36×28 18	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	at	40×26 15	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	au	32×29 -	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	av	20×22 -	-	-	
	d	86×66 17	-	-	S	aw	39×30 8	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	ax	30×30 10	-	-	
	f	38×44 9	-	-	S	ay	26×22 22	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	az	36×26 10	-	-	
S B 31	h	42×40 16	-	-	S	ba	36×28 18	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	bb	40×26 15	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	bc	32×29 -	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	bd	28×23 22	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	be	34×28 12	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	bf	34×27 -	-	-	
	d	86×66 17	-	-	S	bg	53×45 33	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	bh	41×32 23	-	-	
S B 32	f	38×44 9	-	-	S	bi	33×30 8	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	bj	29×28 7	-	-	
	h	42×40 16	-	-	S	bk	28×23 22	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	bl	30×30 10	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	bm	32×29 8	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	bn	36×28 18	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	bo	30×30 10	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	bp	35×35 15	-	-	
S B 33	d	86×66 17	-	-	S	br	37×26 25	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	bs	38×30 15	-	-	
	f	38×44 9	-	-	S	bt	35×35 15	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	bu	36×28 18	-	-	
	h	42×40 16	-	-	S	bv	30×30 10	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	bw	35×35 15	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	bx	36×28 18	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	by	30×30 10	-	-	
S B 34	b	50×46 24	-	-	S	bz	35×35 15	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	ca	32×29 -	-	-	
	d	86×66 17	-	-	S	cb	29×20 -	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	cc	34×28 12	-	-	
	f	38×44 9	-	-	S	cd	34×27 -	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	ce	53×45 33	-	-	
	h	42×40 16	-	-	S	cf	28×23 22	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	cg	36×28 18	-	-	
S B 35	j	45×36 10	-	-	S	ch	30×30 10	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	ci	35×35 15	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	cj	36×28 18	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	ck	30×30 10	-	-	
	d	86×66 17	-	-	S	cl	35×35 15	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	cm	36×28 18	-	-	
	f	38×44 9	-	-	S	cn	30×30 10	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	co	35×35 15	-	-	
S B 36	h	42×40 16	-	-	S	cp	36×28 18	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	cq	30×30 10	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	cr	35×35 15	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	cs	36×28 18	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	ct	30×30 10	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	cu	35×35 15	-	-	
	d	86×66 17	-	-	S	cv	36×28 18	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	cw	30×30 10	-	-	
S B 37	f	38×44 9	-	-	S	cx	35×35 15	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	cy	36×28 18	-	-	
	h	42×40 16	-	-	S	cz	30×30 10	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	ca	35×35 15	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	cb	36×28 18	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	cc	30×30 10	-	-	
	b	50×46 24	-	-	S	cd	35×35 15	-	-	
	c	40×21 8	-	-	S	ce	36×28 18	-	-	
S B 38	d	86×66 17	-	-	S	cf	30×30 10	-	-	
	e	70×41 19	24×24 19	-	S	cg	35×35 15	-	-	
	f	38×44 9	-	-	S	ch	36×28 18	-	-	
	g	40×27 17	37×28 -	-	S	ci	30×30 10	-	-	
	h	42×40 16	-	-	S	cj	35×35 15	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	ck	36×28 18	-	-	
	j	45×36 10	-	-	S	cl	30×30 10	-	-	
	a	42×34 11	-	-	S	cm	35×35 15	-	-	
S B 39	b	50×46 10	-	-	S	cn	36×28 18	-	-	
	c	53×46 16	-	-	S	co	30×30 10	-	-	
	d	50×50 28	15×15 30	-	S	cp	35×35 15	-	-	
	e	42×34 11	-	-	S	cq	36×28 18	-	-	
	f	44×30 21	-	-	S	cr	30×30 10	-	-	
	g	56×46 10	-	-	S	cs	35×35 15	-	-	
	h	40×21 8	-	-	S	ct	36×28 18	-	-	
	i	45×36 10	-	-	S	cu	30×30 10	-	-	
S B 40	j	45×36 10	-	-	S	cv	35×35 15	-	-	
	a	33×31 16	-	-	S	cw	36×28 18	-	-	
	b	49×30 23	-	-	S	cx	30×30 10	-	-	
	c	34×34 13	-	-	S	cy	35×35 15	-	-	
	d	50×41 15	-	-	S	cz	36×28 18	-	-	
	e	48×36 18	-	-	S	ca	30×30 10	-	-	
	f	50×35 14	-	-	S	cb	35×35 15	-	-	
	g	31×21 11	-	-	S	cc	30×30 10	-	-	
S B 41	h	29×20 16	-	-	S	cd	35×35 15	-	-	
	i	34×28 22	-	-	S	ce	30×30 10	-	-	
	j	30×25 7	-	-	S	cf	36×28 18	-	-	
	a	29×28 7	-	-	S	cg	30×30 10	-	-	
	b	32×23 22	-	-	S	ch	35×35 15			

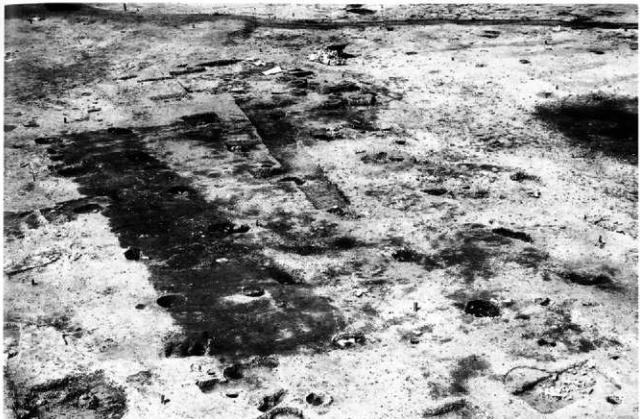
表12 摺立柱建物跡軸方向・規格

建物No.	軸 方 向	桁 行	縦 行	規 模	建物No.	軸 方 向	桁 行	縦 行	規 模
SB1	N-12° -E	7.28	5.24	2×3	SB34	N-6° -W	5.30	3.98	2×2
SB2	N-11° -E	7.30	5.52	2×3	SB35	N-36° -E	3.20	3.05	1×1
SB3	N-4° -E	7.35	4.00	3×1	SB36	N-30° -E	3.50	3.00	1×1
SB4	N-22° -E	14.86	6.14	7×3	SB37	N-63° -E	2.40	2.40	1×1
SB5	N-22° -E	15.36	-	-	SB38	N-17° -E	8.90	-	-
SA6	N-22° -E	-	-	-	SB39	N-20° -W	4.54	4.40	2×2
SB7	N-22° -E	4.06	3.72	2×2	SB40	N-5° -W	4.85	3.74	2×1
SB8	N-42° -E	-	4.60	-	SA41	N-6° -W	-	-	-
SB9	N-21° -E	8.43	5.30	4×2	SB42	N-6° -W	8.40	3.83	2×1
SB10	N-21° -E	-	5.22	-	SB43	N-12° -E	4.44	2.60	2×1
SB11	N-22° -E	-	5.92	-	SB44	N-12° -W	8.48	2.00	3×1
SB12	N-16° -E	-	6.53	-	SB45	N-4° -W	4.41	2.50	2×1
SB13	N-38° -E	-	4.50	-	SB46	N-10° -E	7.32	4.64	2×3
SB14	N-20° -E	-	6.55	-	SB47	N-40° -E	8.99	2.48	3×1
SB15	N-17° -E	8.36	7.20	4×2	SB48	N-17° -E	4.40	3.82	2×2
SB16	N-2° -E	-	5.73	-	SA49	N-18° -W	-	-	-
SB17	N-4° -E	-	5.44	-	SB50	N-19° -W	6.91	2.33	3×1
SB18	N-16° -E	-	5.58	-	SB51	N-18° -W	6.95	6.90	3×1
SB19	N-3° -E	-	5.66	-	SA52	N-9° -E	-	-	-
SB20	N-25° -W	-	7.46	-	SB53	N-3° -W	4.87	2.45	1×2
SB21	N-10° -E	-	7.46	-	SB54	N-1° -W	7.58	4.54	3×2
SB22	N-2° -E	-	4.90	-	SB55	N-0° -E	4.77	4.54	2×2
SB23	N-6° -W	-	-	-	SB56	N-27° -E	6.35	2.10	3×1
SB24	N-18° -E	8.16	4.10	3×2	SB57	N-8° -E	6.35	5.99	2×2
SB25	N-18° -E	8.20	4.98	3×2	SB58	N-12° -E	3.96	3.12	2×1
SB26	N-2° -E	5.04	4.10	2×1	SB59	N-15° -E	5.76	5.66	2×1
SB27	N-5° -E	6.81	2.40	3×1	SB60	N-3° -W	3.88	2.40	2×1
SB28	N-20° -E	9.18	5.04	3×2	SB61	N-56° -E	3.98	2.00	2×1
SA29	N-21° -E	-	-	-	SB62	N-5° -E	4.13	2.00	2×1
SB30	N-20° -E	6.46	2.55	3×2	SB63	N-12° -W	5.16	3.10	2×1
SB31	N-18° -E	6.53	4.76	3×1	SB64	N-25° -E	8.17	3.80	3×1
SB32	N-12° -E	7.02	3.83	3×2	SB65	N-20° -E	4.08	4.07	2×2
SB33	N-19° -E	9.26	3.84	-	SB66	N-22° -E	5.30	2.40	2×1

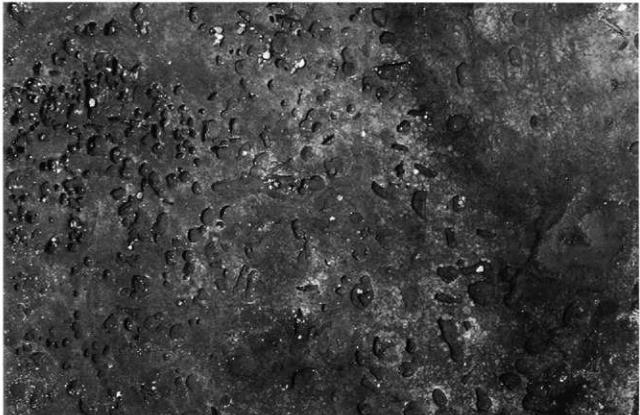
報告書抄録

ふりがな	しろとりたてあとはっくつちょうさぼうこくしょ						
書 名	白鳥館跡発掘調査報告書						
副 書 名							
卷 次							
シ リ ズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シ リ ズ番号	第85集						
編 著 者 名	黒沼昭夫 多田和弘						
編 集 機 関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所 在 地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発 行 年 月 日	2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ 一 ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
白鳥館跡	市町村 : 遺跡番号	6208	平成11年度 登録	38度 30分 39秒	140度 19分 26秒	20000417 ~ 20000728	6,400 県営ほ場 整備事業 (宮下地区)
種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
城館跡	中世 (13世紀 ~ 18世紀)	摺立柱建物 櫛列 川 土杭 柱穴	62 4 1 2,000	輸入陶磁器(青磁、三彩盤) 珠洲系陶器(甕、擂鉢) 陶磁器(皿、碗、甕、擂鉢) 石製品(砥石、とりべ、石 鉢、くぼみ石、石斧) 金属製品(吸い口、鉄津) 柱根(100) 古鏡(50)	大型の堀を持つ摺立柱 建物跡を多数検出。また建 物に使用された柱根が多 く残存している。		(総出土箱数: 6)

図 版

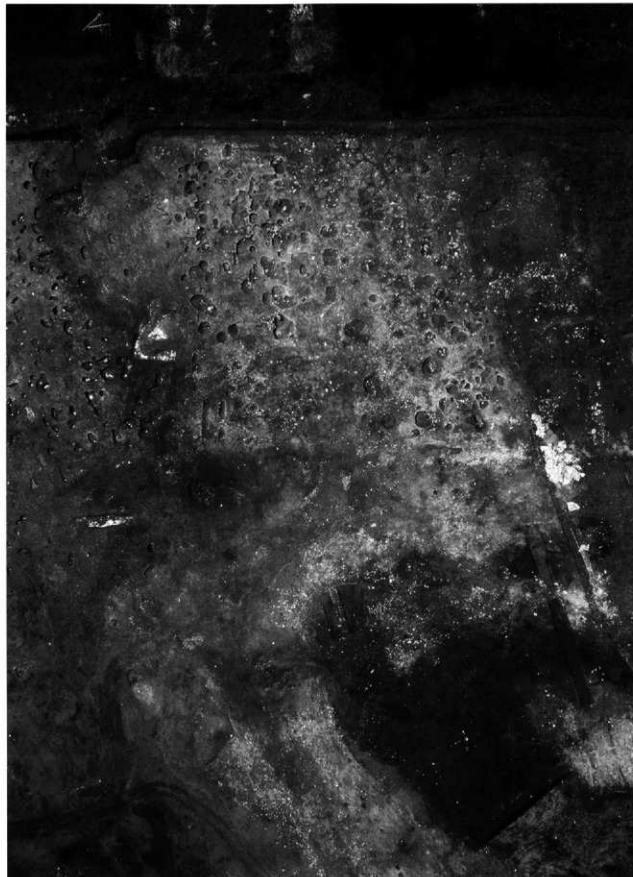


SB 1・2 堀立柱建物跡（南から）



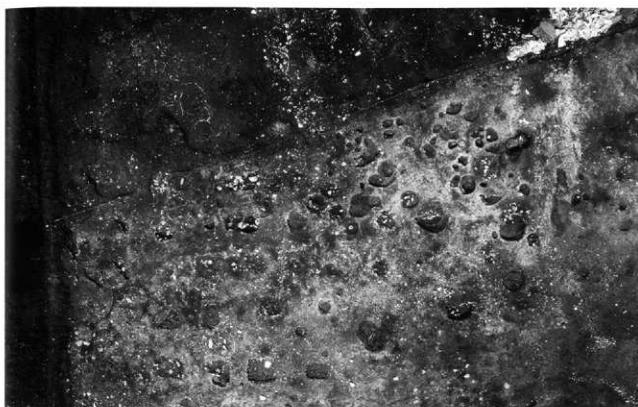
SB 4～7 堀立柱建物跡（航空写真）

図版 2



SB 8 ~ 15掘立柱建物跡（航空写真）

図版 3



SB16～23掘立柱建物跡（航空写真）



西侧基本層序（南東から）



東側基本層序（北西から）



SG240河川跡西トレンチ土層断面



SG240河川跡東トレンチ土層断面

図版4



SK1024検出状況（北から）



SK1024土層断面（南から）



SK1024内RP 3 - 4 出土状況（南から）



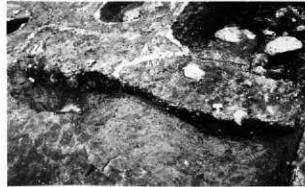
SK1024内RW 6 出土状況（南から）



SK1033土層断面（南から）



SK1033内RP 2 出土状況（南から）



SK1860 - 1861土層断面（南から）



SK1860内RM 24出土状況（東から）

図版5



SK611検出状況（南から）



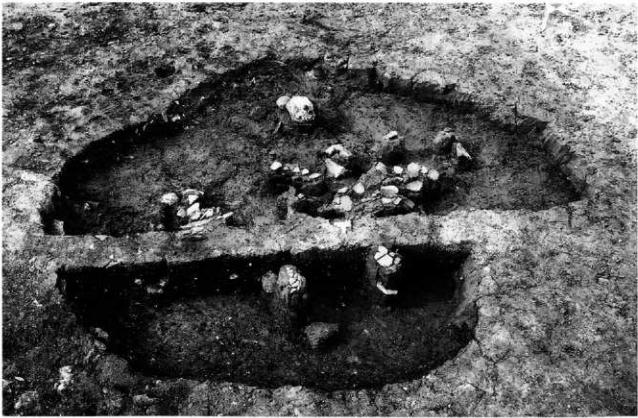
SK792完掘状況（北から）



SK792内RP 8 出土状況（南から）

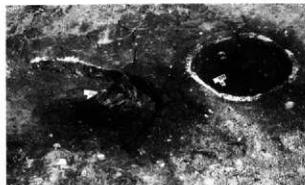


SK792内RM 9 出土状況（南から）



SK2148縄文土器出土状況（南から）

図版 6



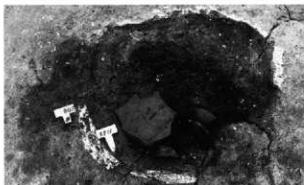
EP594・SB32-d 検出状況（南西から）



EP594土層断面（南西から）



SB32-d 土層断面（南西から）



EP993内RP11出土状況（南から）



SB8～15半截状況（東から）

図版 7



SB4-e 土層断面（東から）



SB15-g 土層断面（南から）



SB19-a 土層断面（南から）



SB27-f 土層断面（南から）



SB33-f 土層断面（南から）

図版8



SB10-m内RP21出土状況（南から）



EP1791内RP23出土状況（東から）



RM16古錢出土状況（南から）

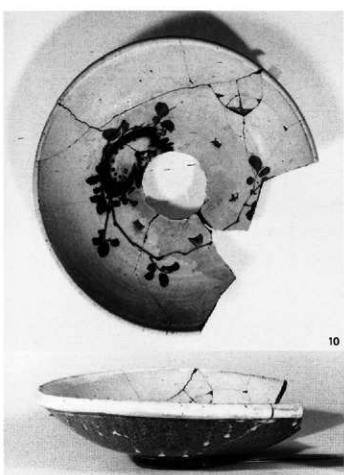
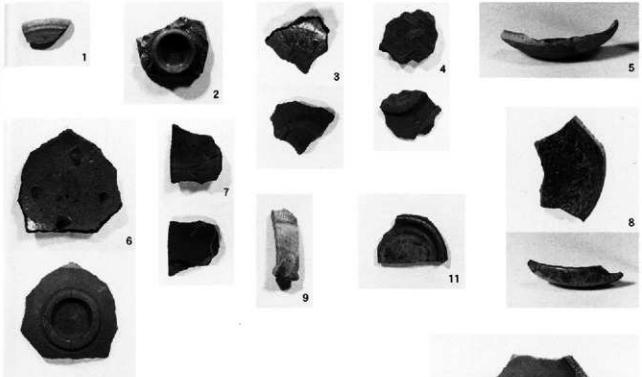


SB10-f 内むしろ出土状況（南から）

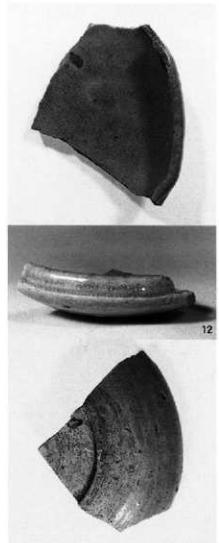


作業風景（南から）

図版9

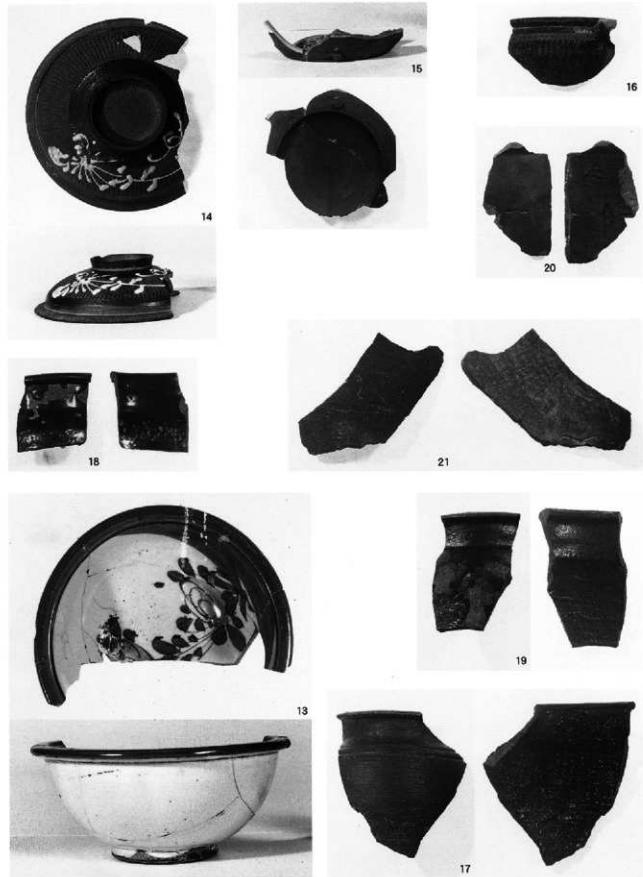


10

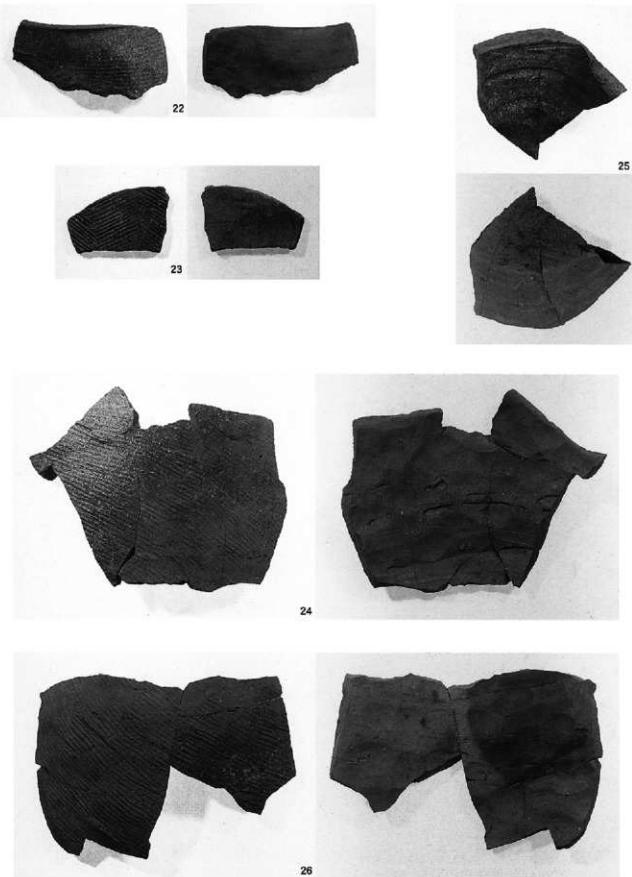


11

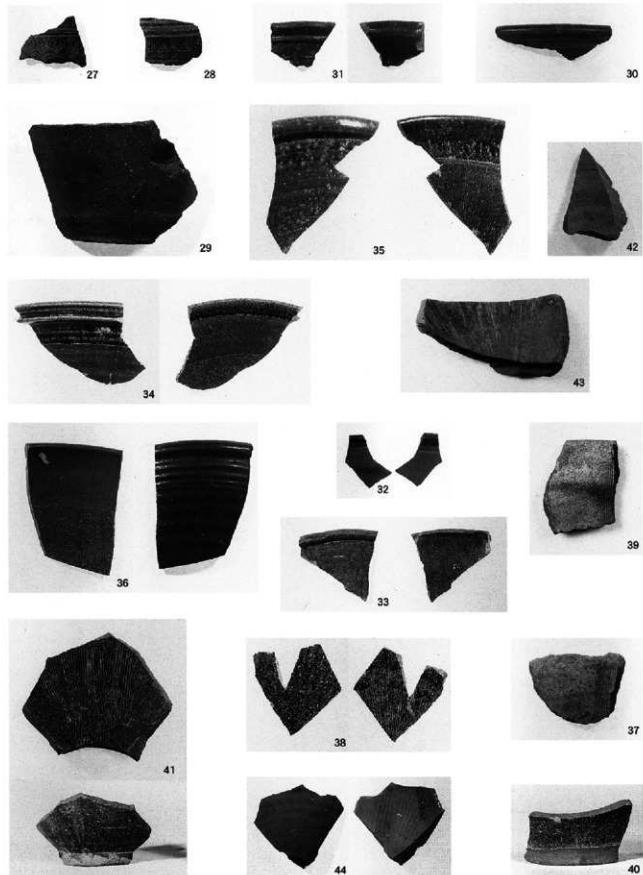
図版10



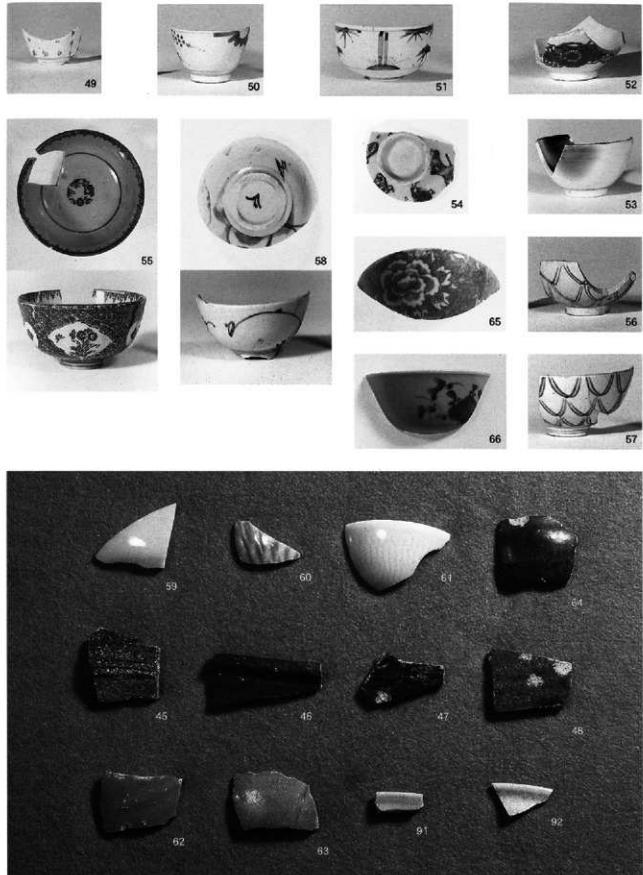
図版11



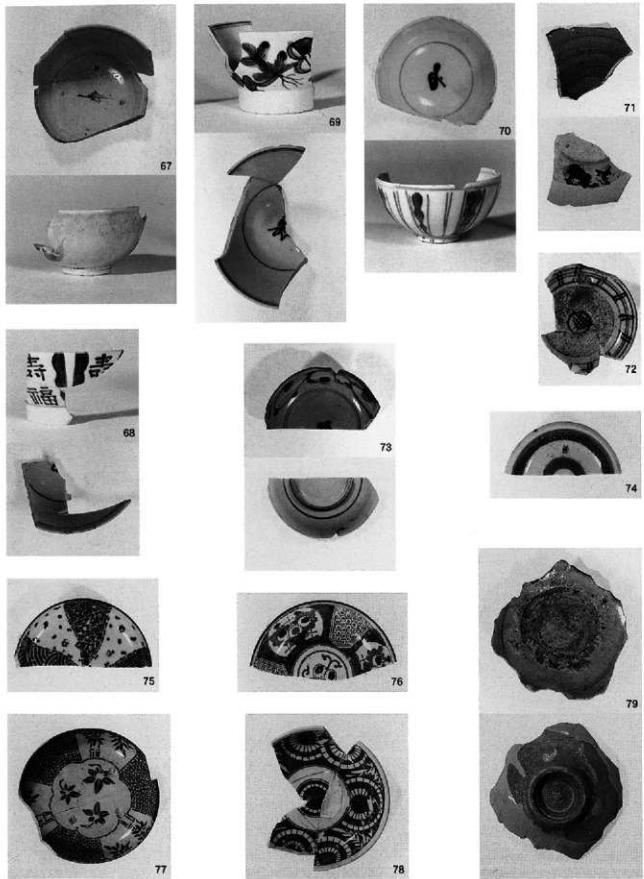
图版12



图版13



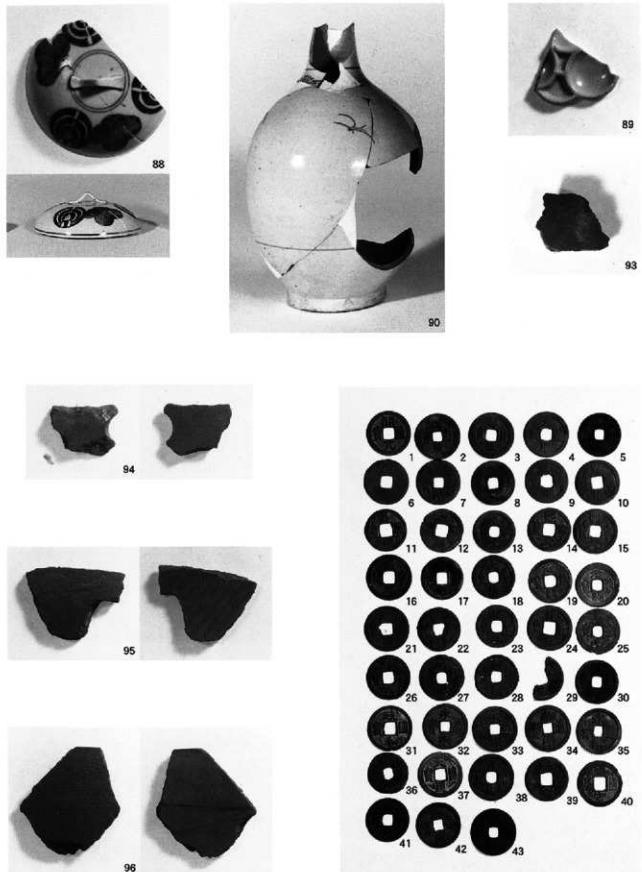
図版14



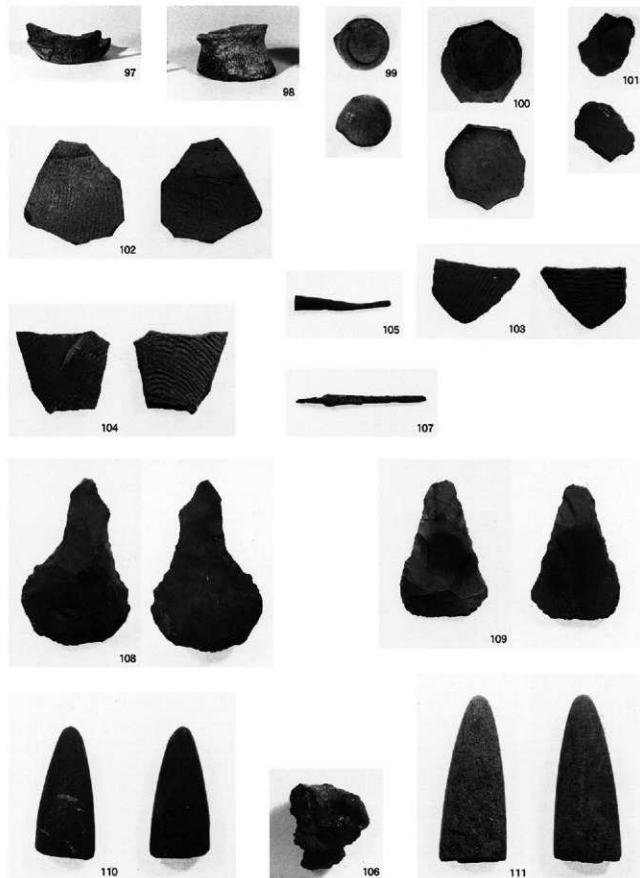
図版15



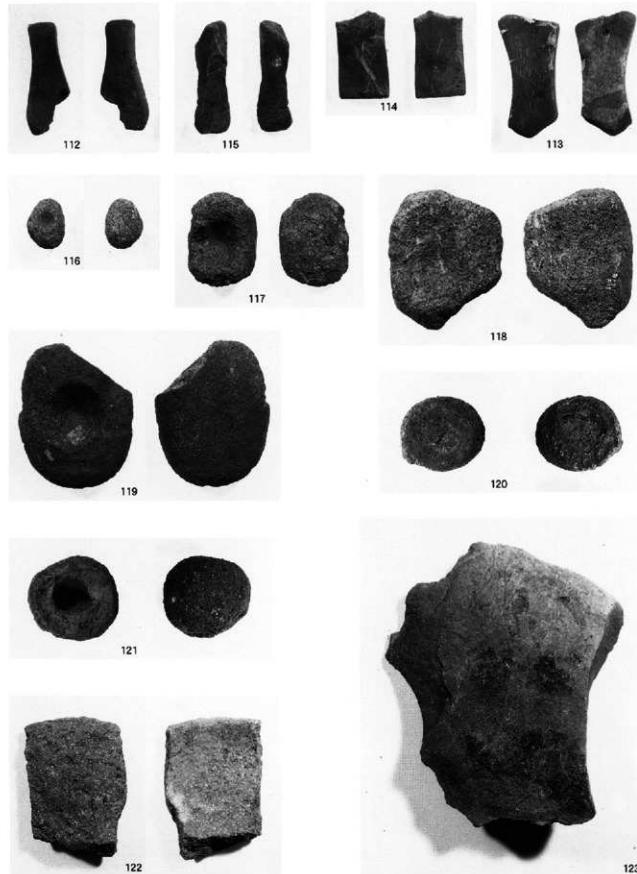
図版16



図版17



図版18



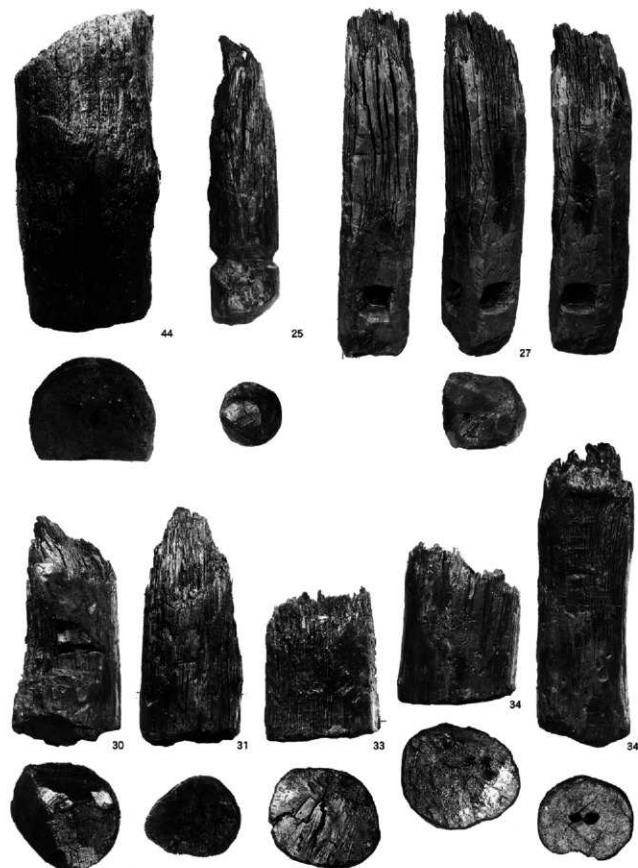
図版19



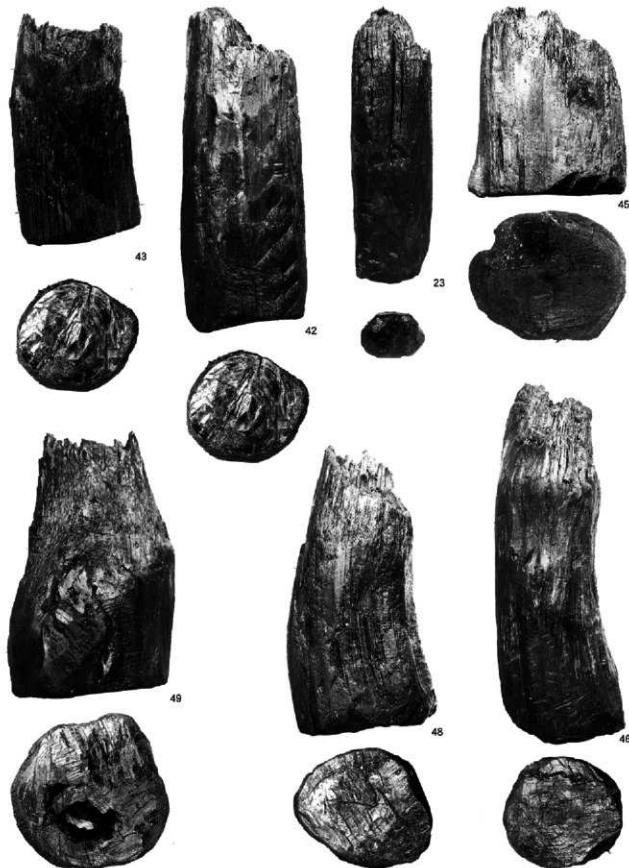
図版20



図版21



図版22



付編

白鳥館跡から出土した木材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

白鳥館跡では、中世の掘立柱建物跡、土坑、柱穴、河川跡などの遺構が検出されている。掘立柱建物跡は合計7棟確認されており、一部には柱根が残存している。柱材の形状は、丸材、荒い面取りした材など建物によって異なる。今回の分析調査では、出土した柱根の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、機種同定を併せて行い、当時の用材に関する資料を得る。なお、いずれも当時の建築材の実態を伝える貴重な遺物であることから、試料の採取は必要最小限に留めた。そのため、放射性炭素年代測定は、少量でも測定可能な加速器質量分析法(AMS法)を選択した。

1. 試 料

試料は、出土した木材5点(試料番号1~5)である。このうち、放射性炭素年代測定は、試料番号1~4の4点について行い、機種同定は全点を対象とする。

2. 方 法

(1) 放射線炭素年代測定

測定は、韓国地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国B社が行った。

(2) 機種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の微細切片を作製し、ガム・クロラール(泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結 果

放射性炭素年代測定および機種同定結果を、表1に示す。SB4、14、21から出土した柱材の年代は、補正年代でいずれも近似し、320~380BPであった。しかし、SB2は940BPで他よりも古い値を示す。

一方、木材の機種は、いずれも落葉広葉樹で、3種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケンボシナ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*)ブナ科

環孔材で、孔間部は1~2列、孔周囲で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sied. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1~4列、孔圈外で急激へやや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

・ケンボナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

保存状態が悪い。環孔材で、孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では精円形、單独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形~精円形、單独および放射方向に2~3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~5細胞幅、1~50細胞高。

4. 考 察

(1) 年代について

柱材のうちSB4、14、21では、補正年代で320~330BPの年代値が得られた。この結果から、3棟の掘立柱建物跡は、比較的近い時期に建てられた可能性がある。これらの年代値は、中世末~近世に該当する。これは、本遺跡から15~16世紀頃の青磁が出土していることや、本遺跡の南約1kmに位置する白鳥城跡の発掘調査所見とも調和的である。一方、SB2では、補正年代で930BPの年代値が得られた。他の掘立柱建物跡とは明らかに年代が異なっていることから、SB2については古代の掘立柱建物跡の可能性もある。

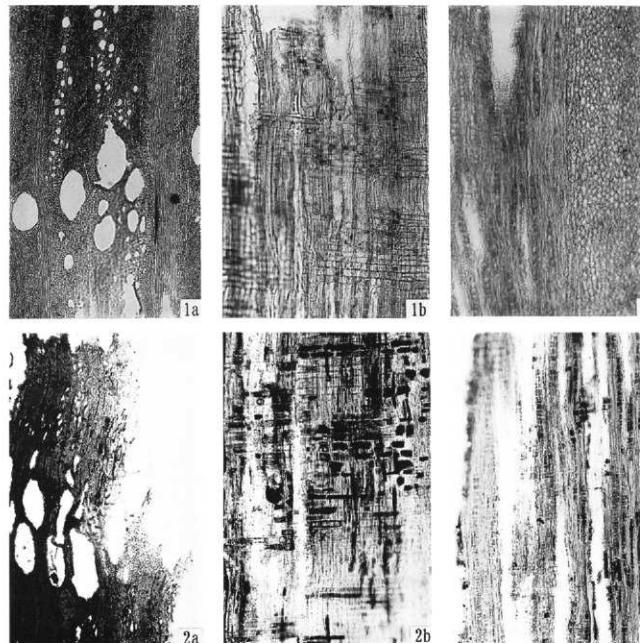
(2) 用材について

掘立柱建物跡の柱根は、コナラ節、クリ、ケンボナシ属の3種類がみられた。掘立柱建物の柱材は、強度が重要であることが推定できるが、その他にも直接地中に埋めることから、耐水性や耐朽性も重要な要素であったと考えられる。今回認められた種類では、クリが強度や耐朽性に優れた材質を有する(平井、1980)。また、コナラ節も強度に優れた材質を有する(平井、1979)。ケンボナシ属は、重さは中庸、粗軟で工作は容易であるが、狂いはない(柴田、1957)。

これらの材質から考慮すれば、クリやコナラ節の柱材は、強度や耐朽性などの材質を考慮した上で選択されていた可能性がある。一方、ケンボナシ属は、クリやコナラ節に比較すると材質が劣る。そのため、ケンボナシ属の柱材が検出されたSB14では、他の建物跡と異なった用材が行われていた可能性がある。しかし、柱材は各建物で1点づしか同定しないため、詳細は不明である。今後、各建物の柱材すべての樹種構成を明らかにしておきたい。

引用文献

- 平井信二(1979) 木の事典 第2巻. かなえ書房.
平井信二(1980) 木の事典 第4巻. かなえ書房.
柴田桂太郎(1957) 資源植物事典(増補改訂版). 904p., 北隆館



図版1 木材

1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (SB4EB390)
2. クリ (SB2EB783)
a:木口, b:板目, c:板目



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第85集

白鳥館跡発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301

印刷 株式会社大風印刷
